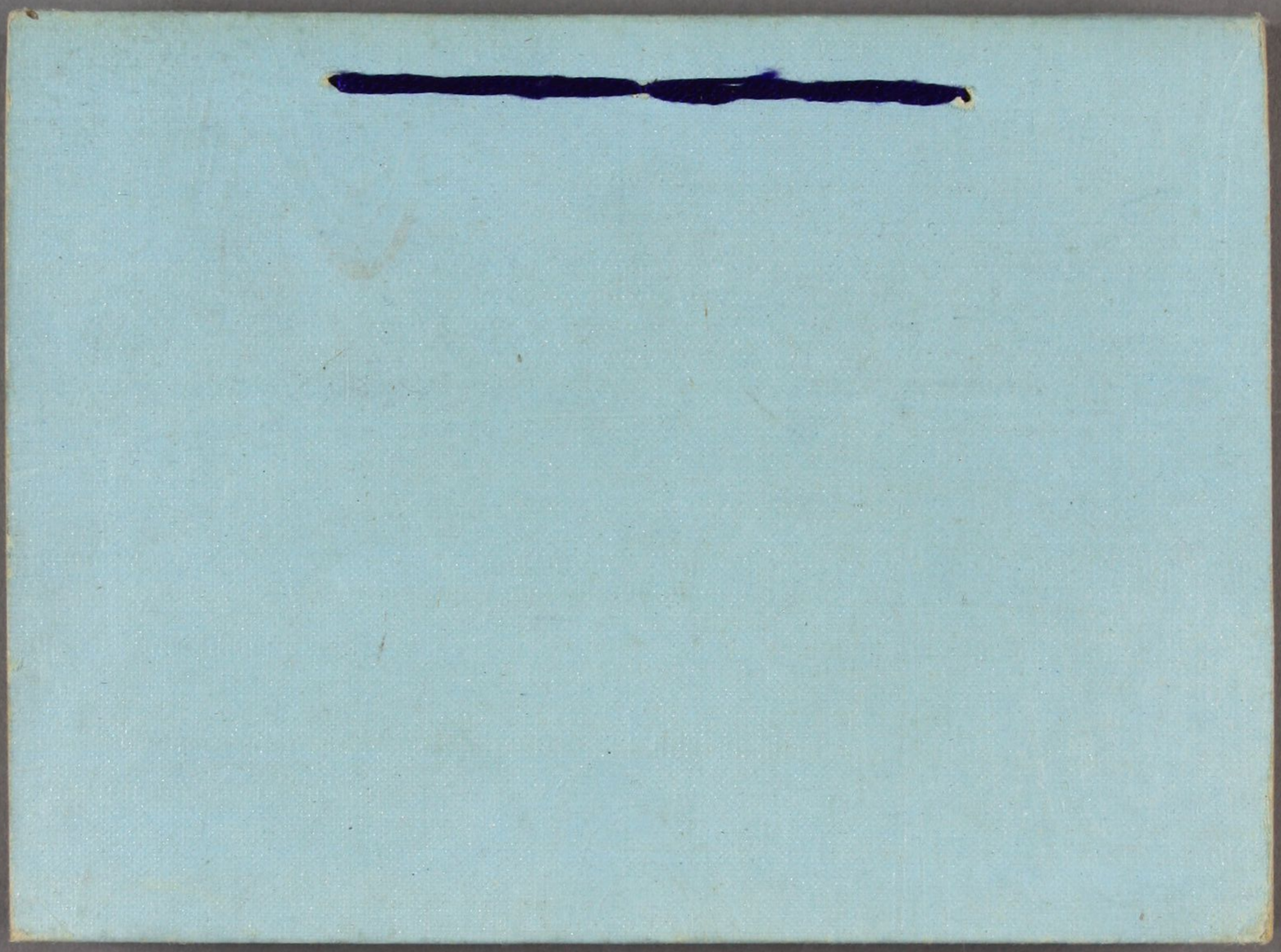
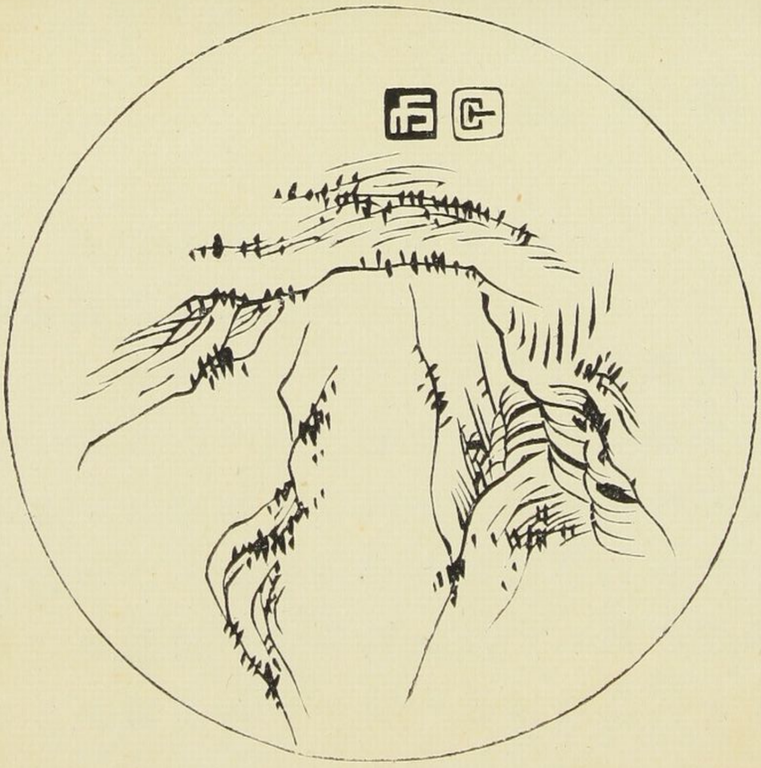
溪韻松聲

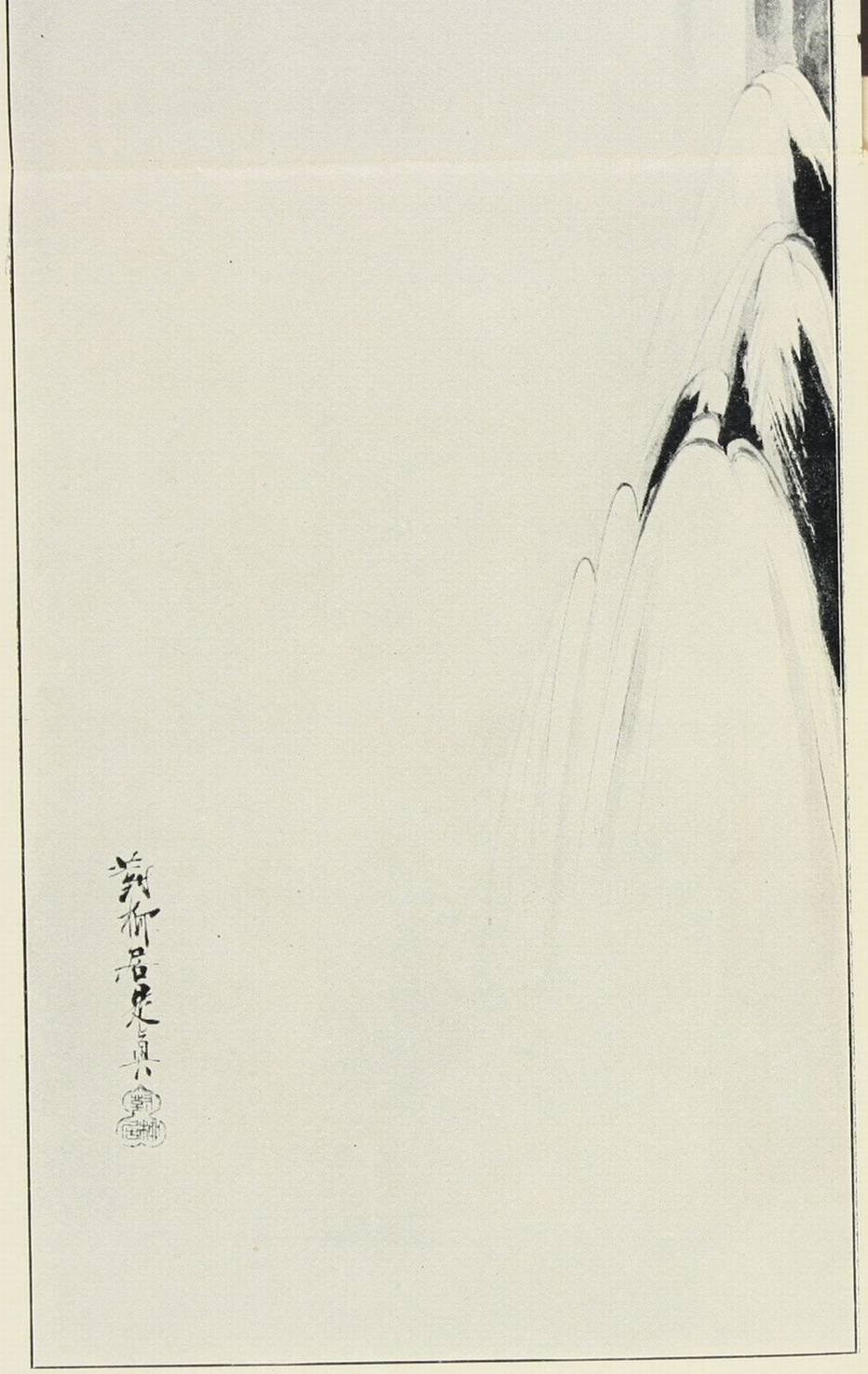




古の人言へるあり曰く、語快なれば人をして舞はしめ、語悲しければ人をして泣しむ、語險なれば人をして危ふましめ、語怒れば人をして劒を按せしめ、語激すれば人をして筆を投ぜしめ、語高ければ人をして雲に入らしめ、語低ければ人をして石に下らしむと、移して呦鹿庵瘠星が新著溪韻松聲に題す

明治三十二年五月盡日

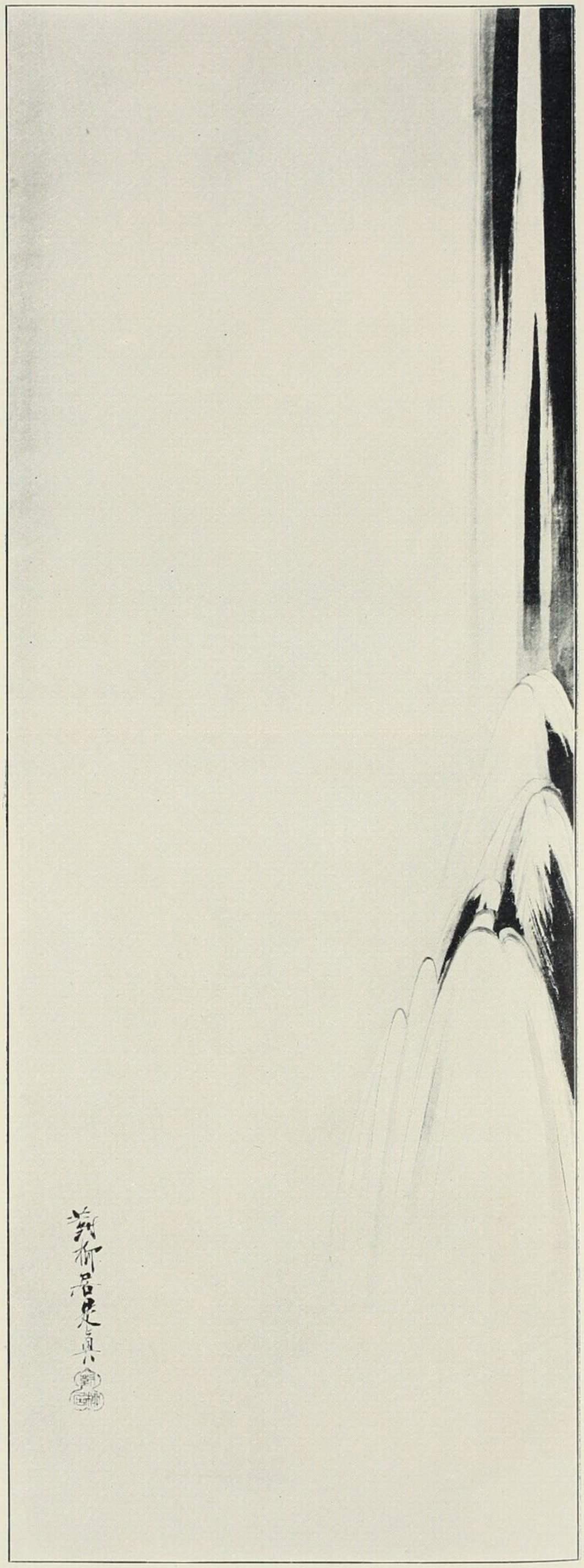
麗水逸生識



古の人言へるあり曰く、語快なれば人をして舞はしめ、語悲しければ人をして泣しむ、語險なれば人をして危ふましめ、語怒れば人をして劒を按せしめ、語激すれば人をして筆を投ぜしめ、語高ければ人をして雲に入らしめ、語低ければ人をして石に下らしむと、移して呦鹿庵瘠星が新著溪韻松聲に題す

明治三十二年五月盡日

麗水逸生識



按せしめ、語激すれば人をして筆を投ぜしめ、語高ければ人をして雲に入らしめ、語低ければ人をして石に下らしむと、移して呦鹿庵瘠星が新著溪韻松聲に題す

明治三十二年五月盡日

麗水逸生識

議するに順序を設けず、論ずるに一定の標目なし。唯だ漫然として嘲り、漫然として罵る。素是れ病臥中硯海の餘滴一個の側面觀に過きず。左らば、矛楯もあらむ、撞着もあらむ。僭上のそしりは始より甘ずる處。若し夫れ、秩序あるものに到つては、乞ふ、他日を期せむ。

明治三十二年五月上旬

千代田城内の新緑を眺めて

呦鹿庵瘠星誌

溪韻松聲目次

靜思せよ……一頁
自己の鼓吹……三
雲霧と光明……五
淸　濁……七
毒舌と蠻刄……九
極端と極端……一一
天然花と造花……一三
優美なる武士……一五
利根川……一七
悲觀の極……一九
漁村の詩趣……二一
水の詩趣……二三

宇宙の俗了……二五
美人と白骨……二七
信仰と詩歌……二九
社會の全面……三一
春宵繫舟……三三
寄梨花歌……三四
回顧せよ……三五
黄金の勢力と腐敗の程度……三七
名譽と德行……三九
所謂社界の制裁……四一
歴史と偉人……四四
吾人が勁敵……四六
敵と味方……四八

偉人の他面……五〇
勇士が最後……五三
死と責任……五五
奴隷と羨慕……五七
青年と心的奴隷……五九
自由に飛べ……六一
捲土再來……六三
折々草(其一)……六五
自然詩人よ……六七
詩人と偏頗……七一
詩人と側面觀……七四
詩人と嬰兒……七六
作者と細工師……八〇

折々草(其二)……八一
主義と看板……八二
不當の讃辭……八四
裝飾と罪惡……八七
社界と半可通……八九
兩面の偏執……九一
不義と矛盾……九四
希望と人生……九六
薄情と才子……九八
時間と議論……一〇一
汝に問ふ……一〇三
偉人と無我……一〇五
人生と直線……一〇六

處世術と詐欺……一〇七
偶然と滑稽……一〇八
青史と英雄……一一〇
姦說と格言……一一一
服從と獨立……一一二
使者と被使者……一一三
飲食と生活……一一五
過、過を產む……一一七
造化の妙……一一八
平民の進歩……一一九
俗謠文學……一二〇
俗僧と念佛……一二一
奇嬌の文字……一二三

女神の姿……一二四
折々草(其三)……一二五
溪聲水韻……一二七
山莊の一日……一三二
雜花賣……一三五
折々草(其四)……一三九
半面の美……一四〇
風流と聾者……一四七
笠と詩……一四八
笛の聲……一五〇
花の蔭……一五二
梨花……一五四
枯柳と青柳……一五五

遊女と山吹……一五七
葬儀……一五八
青麥……一六〇
偉人の片影……一六二
夢……一六四
春雨……一六七
春風……一六七
春宵……一六九
折々草(其五)……一七〇
教訓的俳句……一七一
四季の月……一七九
案山子先生……一八七
猿と俳句……一八九

狐と俳句……一九二
鼠と俳句……一九五
猪猴と俳句……一九七
蚤虱と俳句……一九九

溪韻松聲目次 全

附錄

新養老物語

溪韻松聲

呦鹿庵主人著

静思せよ

◎謠はん乎、先づ静思せよ。
◎叫ばん乎、先づ静思せよ。
◎静思は吾人に、天命の影を示す。
◎花咲かば、其の影を乘せて、徐ろに流れ去る春水のほとり、静かに坐して、花の私語、水の聲を傾聽せよ。

◎花散ば、緑蔭風涼しきほとり、靜かに一卷の詩集を繙きて、夏の私語、森の聲を傾聽せよ。

◎秋は枯野の私語、時雨の聲、冬は雪の私語、寒月の聲。

◎天命の影は、枯れ尾花の末にも宿りて、靜思する人の心に波紋を與ふ。此の影を捉へずんば、詩歌は死せんのみ。

花さかり
後姿に
風ぞ吹く　晩翠

自己の鼓吹

◎誰れか自己を離れて、自己の影を有せむや、彼の聲は、彼の影なり。彼れ沒すれば、影また沒す。

◎西行が短歌は、西行が影なり。トルストイの詩は、トルストイの影なり。トルストイを離れて、トルストイの詩はなく、西行以外西行の歌はなし。

◎彼の詩歌は、自己の影なり、自己の鼓吹なり。彼は自から、彼れ自身を哀れみ、彼れ自身を悲み、彼れ自身を泣き、彼れ自身を憤り、而して、彼れ自身が認めたる光明を說きぬ。

◎悪人と痴人の影は如何。コハ、自から己を誹謗するの外、他を意味せず。また是れ自己の鼓吹ならずや。

明月や
壘の上に
松の影

其角

雲霧と光明

◎毀譽は人生の行路に蟠まる、一種の雲霧なり。是れを一掃し能はざるの人は、到底光明を認め得ざるの人なり。

◎高山は雲霧以外、超然として俗塵を脱し。偉人は毀譽以外、屹然として日月と親む。

◎餘り多く得失に關心するの人は、得失に倒るゝの人なり、天命を知らざるの人なり、人道に反くの人なり。

◎苟も一道の光明を直覺せんと欲す、雲霧何かあらむ、毀譽何かあらむや。

聞なれて
降らぬに似たり
五月雨　岐答

夕立や
川追ひあげろ
はだか馬　正秀

清濁

◎死するよりは、諂ふを恐れよ。

◎吾人は、ホーマーの言を誦する毎に、血の湧くを覺ゆるなり。

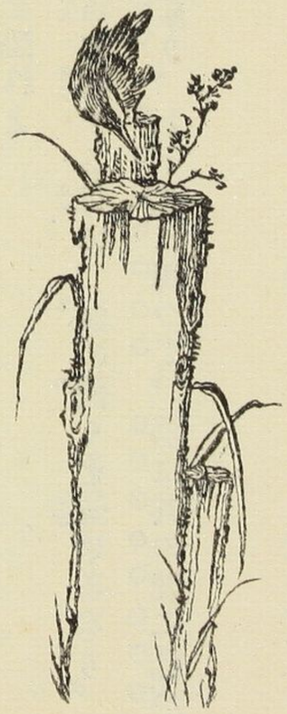
◎死は清なり、諂は濁なり。上下共に濁つて、諂は其の間に己が翼を伸ぶ。

◎偉人が前には、何等の濁流も過ぎる能はざるなり。唯だ清き死の影の横はるのみ。

◎死を恐るゝは凡俗のことなり。而して、阿諂は凡俗が有する專賣權の一なり。

◎噫、阿諂か、吾人は阿諂の餘りに多きに、堪ふる能はざるなり。

翠や
羽を粧ふて
水鏡
露川



毒舌と蠻刄

◎思ふことをして悉く云はしめよ、云はざることをして思ふことを勿らしめよ。蓋し是れ、我家の宗教第一義なり。

◎俗謠子の曰く、

口を開いて笑ふてみせて、
手を出しや針ある栗の毬。

◎世間のこと、何等が斯くの如くならざるものぞ。

◎人を見ば泥棒と思へと云ふ。吾人は此の語中、慥かに一面の眞理あるを信ず。

◎今日の社界は、毒蛇の舌の如し、蠻人の劒の如し。彼は是を包むに、巧に笑みを以てせるなり。其の相食まむとするに於て、何ぞ彼等と異ならむ。

◎笑ふもの眞に笑ふにあらず、泣くもの亦た眞に泣くにあらず。女の裏裡に秘密のあるが如く、彼が悲喜の裏裡には、必ずや恐ろしき罪惡の秘密あるなり。

◎天上天下三世十方悉く夫れ斯の如し。吾人安ぞ堪へむ。

此の様な末世を櫻だらけ哉　一茶

極端と極端

◎極端と極端とは、相接す。

◎極端なる積極主義は、極端なる消極主義なり。

◎マホメットの曰く、

劍は、天堂及び、
地獄の鍵なり。

◎天堂を開閉し得るの鍵は、地獄を開閉し得るの鍵ならざるべかず。天國へ導く慈愛なる掌は、直に以て奈落へ衝き落す可き猛惡なる掌ならざるべからず。人を殺すの劍は、他面に於て、人

を活かすの劍なるなり。

◎死せる英雄は、歴史の上に於て、活けるを見ずや。國亡びて山河あり。羅馬の地、猶ほ古人が歌の響けるを思へ。

◎花を咲かすの雨は、却つて是れ、花を散らすの雨。果然、積極の極端は、消極の極端なりき。

夕涼や
花にうらみし
鐘なれど

三華

天然花と造花

◎花に二種あり。造られたる花、天然のまゝの花。

◎造花の美、時として天然花を壓するものなりと云へども、然かも、彼は生命なきの花なるなり、脈膊なきの花なるなり、自然に却ける花なるなり、死せる花なるなり。造花は遂ひに、造花以上たるを得ず。

◎學者面する淺學者、信者面する不信者、悧好面する才子、其の街へる樣、如何に造花の美に似たらずや。

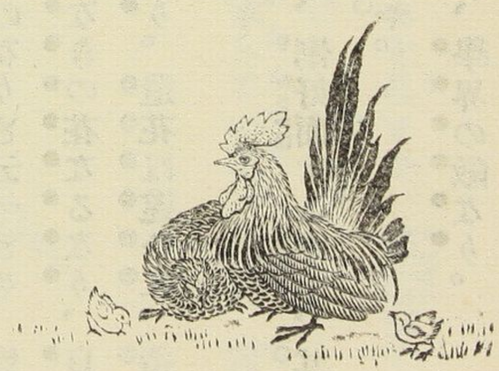
◎彼等は、自然の敵なり、宗教の敵なり、學界の敵なり。

藪入は

中山寺の

男かな

蕪村



優美なる武士

◎文學思想は、人をして優美高尚ならしむ。

◎武人にして、徒らに武ならんか、彼は猶ほ、猛虎のごとし、狼狽のごとし。鐵腕一揮、百獸を擊つの勇はあらむも、嫋女嬰兒をして、靄然狎れしむる能はざるなり。

◎奈良朝の武士を見よ、平安朝の武士を見よ。彼等は如何に優美ならずや、如何に高尚ならずや。彼等の隻手は笛にあり、他手即ち劍を握る。

◎文學思想は、怒濤の如き武人が胸裡に、一波の春水を濺くるも

のなり。

◎現代の所謂紳士なるもの、多くは是れ、美を解せず、情を解せず、況んや詩をや。唯だ利に齷齪として、生涯を不潔する紅塵中に了るの徒のみ。木曾山中より踴り出でたる武人一派と、何の選む所ぞ。何爲ぞ、餘裕なきの太だしき。

秋の心

法師は俗の

窠醒かな

其角

利根川

昨日や今日の春雨に、
利根の水嵩増にけり、
岸の柳の絮ながく、
水の面に垂るゝ迄。

垂れし柳は絶えず間に、
流るゝ水を招けども、
水は無心に搖れつゝ、
川下遠く流れ行く。

吹く風に
牛のわき向く
柳かな　杏雨

悲觀の極

◎向上一轉、塵外に高蹈せるの人は、悲觀の極に達せるに多し。

○

心なき身にも哀れは知られけり、
鳴起つ澤の秋の夕暮。　西行

○

堅横の九尺に足ぬ草の庵、
結ふもくやし雨なかりせば。　佛頂

○

此處も亦た浮世の人の訪ひ來れば、　藤房

空行く雲に宿もとめてん。

◎蕉翁が、雲とへだつ友かや雁の生別れ、と呼び。一茶が、人を見て復々無理に晝寢かな、と叫ふもの、孰れが是れ、ペシムスチックの極ならざる可き。

◎而かも、其の最終の極とは何ぞ。曰く、光明。

月の舟今宵は何處がお泊りぢや

其角

漁村の詩趣

◎漁村の詩趣は、屢々我儕に、ある大なる物の影を示しき。

◎利久の曰く、

おく網のなかに宿れる月影を、
おのが物とや海女の曳くらむ。

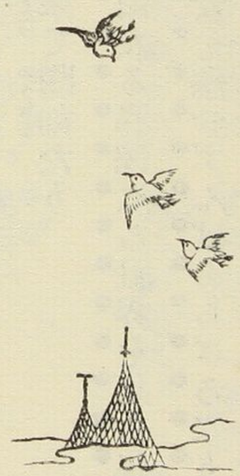
◎無邪氣なる海女が胸中、描き來て躑躅如たり。

◎吾人は恒に、醜面の婦人にも似たる邪慳なる社界を見る毎に、未だ曾つて、利久が歌中の海女を戀せずんばあらざるなり。

霞ふむ濱や　　里丸

ここまて

九十九里



幟立てゝ家に人なき漁村かな　椿堂

芝浦や露に夜明ける軒の妻　伯夫

寒ければ漁村の柳枯れにけり　士朗

水の詩趣

◎水は、最も哲理的詩趣に富みたるものゝ一なり。

◎時によつて、悪魔が狂奔するにも似たる驚波となり。時によつて、乙女が笑靨にも例ふべき平和の小波となる。

◎花咲かば其の影を浮べ、青葉の節となれば其の影を乘せて、無心に流れ去るなり。

◎彼に口なし。而かも、彼は千古拒絶すべからざる眞理を語る。

◎吾人は敢て信ず、哲理的教科の最も大なるもの、是れ即ち水なるを。

是　長

若水や

産湯このかた

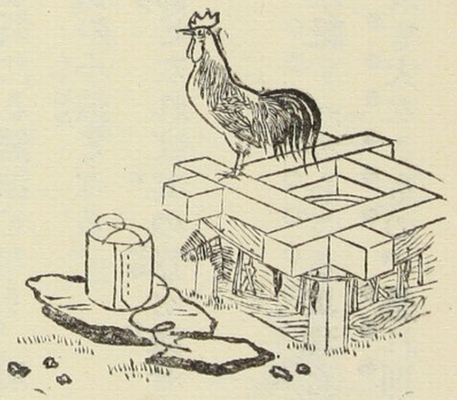
幾千歳

かくてこそ

世は涼しけれ

五十鈴川

野雀



宇宙の俗了

◎人事は宇宙を俗了す。

◎道灌出て、武藏野の古色遂ひに訪ぬ可からざるに非ずや。滊車通じて、近江湖畔の風景損ぜしこと幾許ぞ。

◎然かも、此等は偏頗なる觀察に過すと云へども、足一度び、大磯、箱根、鎌倉、須磨、明石等の地を蹈まば、誰れか幽雅掬すべき地の、年々俗了せられつるを嘆ぜざらむ。

◎人事の未だ進まざるや、宇宙は清淨なる自然美を以て充されたりき。人事の進歩と自然美とは、全く反比例す。

◎ロングフェロー詩中に曰く、

月よ、波間に散る影よ、
天上にては愛の印。
下界に下れば定まらぬ、
波に揺られて浮む影。

◎噫是れ、或る意味に於て、宇宙の俗了を悲むものならざらんや。

辻堂に死する人あり麥の秋

蕪村

美人と白骨

◎ヒユマンス夫人曰く、

願はくは人生をして、此次のページを見せしむること勿れ。

◎榮譽の次の頁は如何。富の次の頁は如何。

◎盈ちたる月は、遂に缺くるにあらずや。盛なる花は、遂に散るにあらずや。

◎散るべきの花ならは、始めより咲かざるに如かず。缺くべきの月ならば、始めより盈たざるに如かず。

◎春宵夢裡の美人、頓ては是れ無情河邊の白骨たるを悟らば、如何に人生の次の頁の敢果なりきと嘆ぜざらむ。

◎紅顔の美少年、頓ては是れ白髪の老翁たるを悟らば、如何に人生の次のページの敢果なきを嘆ぜらむ。

◎願くは吾人をして、總ての悲慘なる人生の次のページを見せしむること勿れ!!!。

中々に持ぬは増しよ散る櫻

一　茶

信仰と詩歌

◎或るものゝ影を示さざるものは、上乘の詩歌にあらず。

◎或るものとは何ぞ。曰く、理想なり、希望なり、主張なり、信仰なり。

◎吾人が古人の詩歌に接するとき、屢々或る靈光を認むるもの、是れ其の詩歌が、千古の眞理を私語する故にあらずや。

山の月、花盜人を照したまふ
露の玉、摘んでみたる童哉
此方とらは、花が咲ふが咲まいが
名月のサッサと急ぎ給ふ哉

白蓮を切んとぞ思ふ僧のさま
門を出れば我も行く人秋の暮
梨の花月に書を讀む女あり

◎理想なきの詩歌は、死せる文字なり。信仰なきの文學は、死文學なり。今日の文學界、夫れ死詩歌ならざるもの幾許ぞ。

小冠者出てゝ花見る人を咎めけり

蕪村

社界の半面

◎社會の半面は邪慳なり。

◎古人定家の曰く、

散る花を追ひかけて行く嵐かな。

◎彼は、何處まで追はんとするか。花は枝を離れて、運命は刻下に迫まれるにあらずや、然かも、狂へる嵐は繼母の如くに、彼を追ひつゝるなり。

◎吾人は、社界の一面に於て、是れに類する悲慘の蟠れるを見る。

◎乞ふ、古人が謠たふ聲を聞け。

行くな鴈何處も炎の浮世ぞや

我と來て遊べや親の無い雀

◎人は彼を目して狂人となす。知らず、誰れか此の邪慳な社界の半面を見て、狂はざるものぞ、泣かざるものぞ、泣かざるは、血なきなり、狂はざるは、熱なき徒のみ。

輕々と笹の上行く月夜かな　梅舌

春宵繋舟

磯に舟つけかりれの夢を、

憎くや女波が搖り起す。

帆柱に燈明ちるや春の雨　啓山

寄梨花歌

淋しき色の面やせて
沈める姿の汝はしも
何に例へて謠ふべき

敢果なき思に打ち惱み
あらぬ人をば戀ひわびる
君が心に似たらずや

回顧せよ

◎願くば人生を回顧せよ！吾人は、將に長眠せむとするの人に向つて、斯く問はんとす。

◎汝は回顧して何を得し乎？吾人は次て、更らに斯く問はんとす。

◎古人の曰く、

世のなかを渡り比べて今ぞ知る、
阿波の鳴戸に涙風もなし。

◎苦と云ひ、悲と云ひ、難と云ひ、易と云ふ、抑も水に浮ぶ一泡

沫に過ぎし。彼は、何か爲めに、苦と云ひしや、難と云ひしや。彼は、今遂ひに答ふる能ふまじ。

秋來ぬと
合點させたる
噫かな

蕪村

黃金の勢力と腐敗の程度

◎黃金の勢力の如何は以て、社界腐敗の程度を知るに足る。

◎太陽波路の果てに沈んで、夕暮の空に如鬼々々と星影の現はるることとく、黃金の光と道德の光は、反比例に去來するものなり。

◎金錢は萬人を頓首せしむべき唯一の力なり、と、バットラーは云へり。彼に一種の勢力あり、頓首するは其の魔力に打たれて敬畏するなり。

◎高利貸の膝下に匍伏する政治家あり、紳士あり、慷慨家あり、

文學者あり、軍人あり。社界は今や貧血病に罹れり。貧乏病や猶ほ未だ可。拜金宗の幣間病に罹るに於ては、腐敗の程度、遂ひに計るべからざるにあらすや。

萬才や
うたふも舞ふも
慾の事
其角

名譽と德行

◎德行を離れて名譽なし。

◎ペトラークもまた、

不朽の名譽は獨り德行に存す

と云はずや。

◎名譽は、如何なる場合に於ても、孤獨にして存すべきものにあらず。德行に附隨する、社界の報酬なるを知らざるべからす。

◎世人往々、名譽を得んとするに汲々として、徒らに外貌を飾り、內に德行に顧るものなし。是れ所謂、ヤコブスの『人は名譽の

記號を買はんとして已の名譽を賣ること多し』にあらずして何ぞ。

◎名譽を買はん爲めになす德行は、僞善なり。僞善の報酬として來りし名譽は、不朽の名譽にあらず。

旅人に

昔話の

新茶かな

乙由

所謂社界の制裁

◎不可思議千萬なる社會の制裁に、默從するを休めよ。唯だ宇宙の眞理に從へ。

◎所謂、社會の制裁ほど……多くの意味に於て……詰まらぬはなし。昨の是は、今の非、今の惡は、明の善。古の大忠臣大孝子も、現代よりして見れば、大罪人、大不孝子たるもの、是れ、社會の制裁が時代によつて異なるが爲めならずして、何ぞ。

◎制裁とは、時代の人情、習慣、の幾分より產み出されたる、愚

者の蔭口のみ。千古拒絶すべからざる眞理にはあらざるなり。

◎既に千古の眞理にあらず、彼れ漫らに人生の自由を束縛せんとせば、須く先づ大喝是を退くべし。沒理的不自然千萬なる制裁、必竟何になるものぞ。

◎エマルソンの曰はずや、

非難の聲は、

賞贊の聲よりも我に快し。

◎奇怪なる社界より、非難の聲を以て葬むられたるものは、公明なる天堂より、賞讃の聲を以て迎へらるゝものなり。

◎正義の爲めに死せし亂臣あり、眞理の爲めに倒れし國賊あり。

正義と戰つて勝ちし忠臣あり、道理を敵として毫も恥ぢざる國民あり、噫、亂臣か忠臣か、國賊か國民か、紛々たる褒貶は他評に委す。誠の人は世評外に超然として、世界末後の日、神の憲法によつてさばかるゝ主の宣告を俟たざる可からず。

心の奔る所は則ち天命の聲なり　シルレル

歴史と偉人

◎雄大の想に富むの地形は、偉人を産む。

◎自然が人生の性格に與ふる力は、決して少々にあらざるなり。

◎天龍の激流に添ふて、家康、秀吉、義元は起り、木曾の峻嶺に麓して、義仲、信長は生し。飛彈の深溪は、光秀、如水の如き士を出しぬ。印度にあらずんば、釋迦は出べからず。而かも、此等の地、今や一人の士なくして、秋風落寞の感あるもの、是れ何ぞや。

◎歴史は人心に大激動を與へぬ。日本戰國時代は、美濃飛彈等に位する、中央人士が心を動かして、朝に西軍を迎へ夕に東軍を招くの止むなきに至らしめぬ。

◎今日、士なきは士なきにあらず。歴史が餘儀なくせしめたる結果のみ。

夏草や　つはものどもが　夢の跡

芭蕉

吾人が勁敵

◎戟を提げて吾人に對ふもの、是れ吾人の敵にあらず。彼は吾人をして、或る境に達せしむべき眞友なり。敵とは、吾人の脊後に坐する補助者を云ふ。

◎戰場に於て勝を得しものが、歷史に於て屢々破るゝは何ぞ。秀吉の敵は、家康に非ずして、大坂城内三成行長の徒なりしを思へ。南洲の敵は甲東にあらずして、麑城三萬の健兒なりしを思へ。淀君の痴躰は、大坂城の末路をして、急がしめ、麑城三萬の健兒が逸りにはやる矢竹心は、南洲をして、城山の露と消さしめぬ。

◎諸將蜂起して、秀吉の勇は益す現はれ、甲東出でゝ、南洲の德望は愈よ現はる。彼は敵にして敵にあらず。眞の敵は恒に脊後に坐せり。誠の偉人は、先づ是れを斷たざる可からず。

蝙蝠に
手許の暗し
油賣り　北枝

敵と味方

◎テニソンの曰く、

敵を作らざるものは、

決して味方を作らず。

◎僅かの味方を有するものは、僅かの敵を有し、大なる敵を有するものは、併せて亦た大なる味方を有するものなるを思はざる可らず。

◎既に、一面に於て大敵を有すると共に、他面に於て大なる味方を有す、偉人たるに何かあらむ。小なる味方と、小なる敵を有するは、必竟小人のことのみ。

◎昔はカーライル、霧深き英の野に、其の劒よりも鋭き、一管の筆を提げて、社界の總てを敵となし、以て、陰霧裡中、一道の光明を示したりき。

◎彼は、邪界の敵たりしと共に、眞理の味方たりしなり。暗黑の敵たりしと共に、光明の味方たりしなり。有ゆる惡魔を敵として、有ゆる眞理の味方となる。彼は偉人なり。

子規啼くや樹の間の角櫓　史邦

偉人の他面

◎過不及なき、是れを人生の上乘と云へば云へ、大瑕瑾あるものに非ざるよりは、大人傑たる能はざるなり。

◎世に凡才あり。衆に秀ず、衆に下らず、中位にありて、僅かに碌々たり。以て俗吏たるべく、以て十圓を頂くべく、以て妻子を養ふべく、以て父母を安んずべく、以て卿黨に稱せらるべく、以て能事終れりとなし、村人野弟また斯くのごとくならんを希ふ。血なく、泪なく、行路に狂風來らず、驚波あがらず、虎を屠ふるの勇もなければ、熊を狎れしむるの智もなく、飼犬

と共に一塊の土饅頭と化す。誠に心細き次第と云ふべし。

◎偉人傑士の出づるや、即ち然らず。彼は、過もなく不過もなき沒趣味の階級よりは現はれざるなり。其の多くは、愚と狂とにて包まれたる最下級の範圍より出づ。偉人と愚者、素と其の範圍を同うせるにあらず、凡俗眼に映ずる兩者は、相去る僅かに一歩、或る點に以て甚だ密接すればなり。

◎彼が歴史や、血なり、泪なり。時に愚も演ぜられ、狂も演ぜらる。狂は疾風の木葉を捲くが如く、愚は大佛の默せるが如し。而かも、一道の大思想は、脈々として其間に通へるにあらずや。

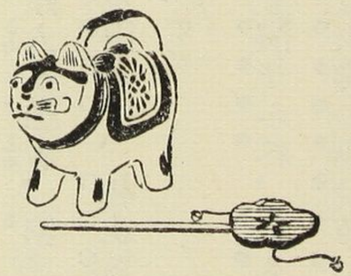
◎由來、大智にして始めて大愚たるべく、大思想にして始めて大狂たるべく、大瑕瑾は遂ひに大人傑を意味す。

松風と

聞けば浮世の

のほりかな

支考



勇士の最後

◎快なるは、勇士が最後なり。

◎亥の歳以來養ひし、腕の力も試しみて、心にかくるものも無き、勇士が末期や如何。風光霽月、洒々落々、眞に掬すべきものあるにあらずや。雪折の谺に響く音、寂寞を破つて枝を謝する椿花の聲、何ぞ夫れ彼が末期の樣と相似たる。

◎生命は短し、然れとも快し、と古人は云へり。吾人をして短き生命に於て、快き死を遂げしめよ。瓦となつて全らんよりは、玉となつて碎けしめよ。縱令、落つる時落てし椿の一期たらずと

も、願くば、藥の下に躓つて、氣息奄々、
肋骨撫でじとすれと寒かな
の歎を發せしむる勿れ。

初雪に此の小使は何奴ぞ　其角

死と責任

◎人生死は一なり。然かも、死を以て責任を遁るゝは易く、責任を全うして死するは難きなり。

◎古來、忠臣義士と云ふもの、多くは死を以て責任を遁れんとするものゝみ。赤穗の義士に到つては即ち然らず。此の點に於て、吾人は楠家一流よりも、良雄等に多とするなり。

◎忠と智とを兼備するもの、誰か良雄の右に出でむ。彼れ翡翠の圖に讃して曰く、

濁り江の濁りに魚は潜むとも、
など翡翠のとらで果つべき。

◎勇なるは大高子葉源吾なり。吉良を討ちて歸へるの途上、冷酒滿飲、吟ずらく、

山を拔く力も折れて松の雪

◎天野屋利兵衛は、義の標準を示す好漢なり。俳に曰く、

屹度した男給仕や初鰹

◎良雄の忠と智とあつて、初めて四十七士を率ゆべく、源吾の勇あつて、初めて吉良を倒すべく、利兵衛の義あつて、初めて一代の秘密を保ち得べかりしなり。

◎春風春雨二百歳、芝高輪のほとり、松杉高く、月光靜かに墓影を顯す。噫。

立ち去ること一里屑毛に秋の峰寒し　蕪村

奴隷と羨慕

◎奴隷は屈從を意味し、羨慕は敬愛を意味す。英雄を崇拜するは、歴史を重ずるが故なり、國躰を重ずるが故なり。然かも、英雄の奴隷となるの意にはあらざるなり。

◎古人を慕はゞ、古人その儘を摸擬せずして、何ぞ其の意氣を慕はざる。其の意氣を學で、何ぞ是れを新なるものゝ上に發せざる。

◎これを是れ爲ずして、古人の舊態を學ぶの徒あらば、云ふまでも無く、彼は古人の奴隷となれるものにあらずや。奴隷と羨慕

とは、隣同士にして、而かも壁一重が十萬億里の距あるもの。

◎吾人は今日、其文學界たると政治界たるとを問はず、總てに對つて是を呼號するものなり。

馬にぬれた丹波與作の時雨哉　大江丸

青年と心的奴隷

◎臆面なく云へば、我は現時の青年に、甚だ慊焉たらぬものなり。

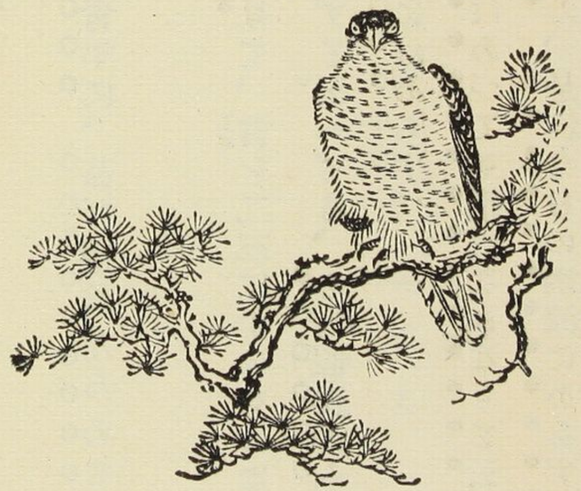
◎彼等の多くは、長者の眼色を見て、言を二三にするものなり。偶々武骨なるもの無きに非らずと云へども、そは假裝のみ、假面のみ。未だ以て眞個の面目にはあらず。

◎何事も長者の云ふに從へ、得はあつても損はなきなりと云ひ、利慾は算して右搖左動するもの、是れ今日の潮流にあらずや。斯の如くんば、青年とは必竟、長者の心的奴隷と云ふの意義に

過ぎず。

ぬくめ鳥　　丹丘

その夜〳〵の
命かな



自由に飛べ

◎エマルソンの曰く、

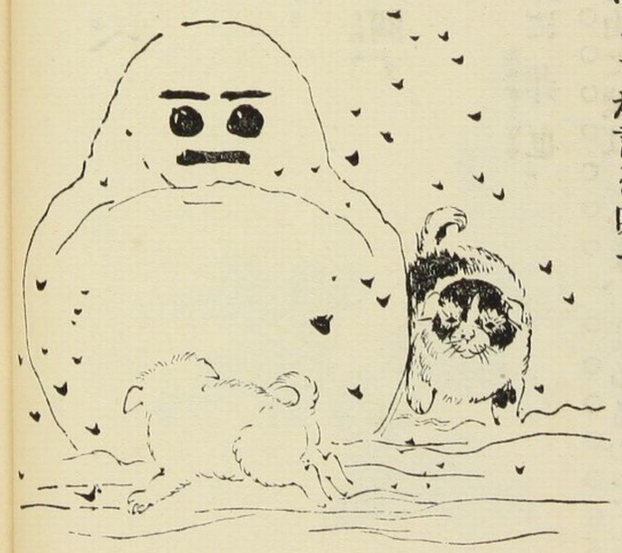
予が當になすべき事は、
總て是れ我に關す。
決して人々の鼻息を、
窺ふべきものに非ざるなり也。

◎乞ふ、飛ぶものをして、自由に飛ばしめよ、走るものをして、自由に走らしめよ。岩ケ根に生へたるの樹木は、生涯、屈曲して大に伸びる能はざるなり。

◎徒らに先進の鼻息を窺ひ、以て己が思想を左右にし、徒らに老人の顔面を窺ひ、以て己が言を二三にする如き、何たる失躰ぞ。

◎現代の青年者流よ、願くばソンが言を味へ。

ちと足らぬ
僕や隣りの
雪もはく
一茶



捲土再來

◎題はくば、齡を算するに、巧勞を以てせよ。

◎唯たに年數を以て數ふることなくんば、先輩必ずしも先輩にあらざるなり。老人必ずしも老人にあらざるなり。況んや黄唇の輩をや。

◎三十にして起ち、四十にして事を成す。三十年の素養と準備は、僅かに四十の曉、事業の第一階級に入らしむるのみならずや。彼は第二階級、第三階級と進まざる可らず。

◎顧みて今の青年や如何。小成小熟、一事の爲す無くして、早く

既に老ひんとす。一敗また一敗、敗を重ぬる毎に、更らに捲土再來の勇を鼓するもの、果して幾人かある。

◎若し夫れ封侯を得ずんば、我れ當に地獄の閻魔王たる可しとふ斗の如き意氣は、年月を以て齡を算せざるもの丶外、到底語る可らざるなり。

夕涼み能くぞ男に生れけり　其角

折々草（其一）

大江戸は霞ヶ關のかすみ哉
夕霞旅僧こゝらに宿をかる
霞みなから衣笠山の暮かゝる
梅か擁し美人寫眞に寫る可く
梅散りて老僧無心に眠りたる
古池に鯉の波紋や散る梅花
碧潭に芹つむ翁髭しろし
泥川に芹おびたゞし穢多の村
富士近く菜の花高く瀛車低し
卯の花や矢傷になやむ勇士が宿

松原をあゆみあきての柳かな　竹夫

まだあさ〳〵は寒き春風　寸芳

取りあげる柄杓に蝶のふと立て　三華

狹くはあれどよき住ひなり　華芳

自然詩人よ

◎伊太利が歐州の公園たるが如く、日本は世界の樂土たり。自然を以て勝れるの國たり。幽雅の景、艶麗の眺、優美の致、是れ當に日本が固有の長所にして、以て萬國に誇るに足るべき價値の一にあらずや。

◎英雄崇拜は、歐州人の長所たるが如く、日本人の長所特技は、自然美の鼓吹にてありしあり。此に於て乎、カーライル、ルーテルは彼に出で、西行、芭蕉は此に出づ。

◎繪畫に就て見よ、人物畫は彼に於て優り、風景畫は此に於て優

る。是れ豈に、彼我の詩人が、固有に先天的に其の地形によつて養はれたる特有の長技を示すものにあらざる無き乎。

◎歐州の地や、由來風光に乏しく、森林深溪、猛獸は到る處に現はれて、人を嚙んとす。勇士は東に西に、猛獸毒蛇を征して、不測の害を除くに日も亦た足らざりき。是れ、彼が英雄を一層崇拜せざる可からざるに到りし遠因にして、頓て亦た、偉人の像、英雄の像、進んでは人物畫の長足の進歩をなせし所以ならずとせむや。

◎日本に到つては、即ち然らず。一度眼を郊外に放てば、眼に映するは優美なる景にあらざれば即ち艶麗なる致、耳に響くは長閑なる小鳥の囀にあらざれば即ち嘲々たる横笛の音。山に猛獸なく、野に毒蛇なし。且つや鎖港二千年の久しき。未だ曾つて外冠の備に偉人を俟ちしことあらざりき。偉人出でざるにあらず、偉人出づるの要なかりしなり。既に先天的の樂土たり、公園たり。樂土、公園には人物を謠ふを要せず、鳥花風月を謠へば足る。是れ頓て、風景畫が長足の進歩をなして、人物畫がゼロなるに至りし所以ならずとせむや。

◎無聲の詩、夫れ斯の如し。有聲の畫、亦た夫れ斯の如くならざるを得むや。

◎吾人は餘りに今日、自然を謠ふ詩人の少きを怪しむもの。自然

詩人よ、何ぞ汝が吟嚢を肥して、世界の樂土たる我國特有の美を謠はざる。奇怪千萬不可思議千萬なる變則の人物畫を描きて、以て得たりとなし、以て新思想となし、以て無上の美を捉へたりとなし、却つて自家特有の風景美を沒却する如き、抑も何たる了簡ぞや。

◎斯の如く徒らに奇にのみ走せて、剛らがる樣にては、奇は即ち奇ならむも、遂に美術の神髓には達し得べからざるなり。一枝の花にも、拒絶すべからざる大思想の籠り得べきを思へ。想とは、奇を衒ふの謂にはあらず。

◎詩人、如何に天上の美に執着するも、其足或る邦土を離るべからざる以上は、吾人は一面に於て、自家特有の美を發揮せざる可からざるの義務あるを信ずるものなり。

散るは〳〵
醉のさめたる
夕さくら　　自槐

詩人と偏頗

◎詩人、其の性や偏頗にして、殆圓滿を缺けり。

◎吾人は寧ろ、偏頗なるが故に大詩人たるを得、圓滿を缺くが故に大詩人たるを得と云ふの適當たるを信ず。

◎偏頗なる詩人が皷吹に依れる政治的革命は、詩人其の者の如くに偏頗なりき。

◎バルンスは如何、ダンデは如何、將た又た今の佛國文豪ゾラは如何。

◎其の傲然自から居るの性、嗚呼是れ頓て偏頗を意味するものならずや

◎彼等が生涯は、偏頗と不圓滿とを告白するの外一物なし。彼等の多くは偏頗なりしが故に、大詩人として成巧したるなり。圓滿を缺きしが故に、文豪として名を成すに至りしなり。

◎吾人は云ふ、不圓滿は偏頗を意味し、偏頗は不平を意味し、不平は痛苦を意味し、痛苦は感激を意味し、感激は頓悟を意味し、頓悟は大思想を意味し、大思想は即ち大詩人を意味すと。

◎方今の文壇、斯の如き大々的偏頗なる詩人ありや否や。

詩人と側面觀

◎社會は、單純なるものにあらずして復雜なり。一方面なるものにあらず、多方面なり、左らば正面より觀察して、美且つ善と映ずるもの。裡面よりして醜且つ惡なるもの有らざる無きを得むや。

◎側面を觀察すること、由來詩人に如かず、狂熱なる詩人が聲には、一面の眞理を謠歌せば、是れ足るなり。

◎歌へ偏頗なる觀察を有する詩人よ汝が聲の枯れむまで調の亂れむまで、鷹の如くに銳利なる眼光を濺いて、美善なる名の下に

包まれつる醜と惡との總てを、我等が前に發現せよ。

奇麗には
過ぎたきものよ

草の露　北柳

詩人と嬰兒

◎詩人と嬰兒、戯於何ぞ夫れ相酷似せるやゝ

◎吾人が直接又は間接に視たる處をして、多く誤らざらしめば、吾人は將に左の如く斷言せむとす。

悲觀の極に到達せる詩人は……嬰兒と相去る一歩なり。

悲觀の極に到達せる詩人は……嬰兒の如くに健設的腦髓に乏し。

悲觀の極に到達せる詩人は……嬰兒の如くに無邪氣なり、また或る意味に於て無意識なり。

悲觀の極に到達せる詩人は……嬰兒の如くに裸躰的なり。而かも、嬰兒が母の乳房を探ぐる如く、詩人は天上の一光明を認む。

◎志望既に天外にあり、紛々たる汚界は、詩人が列を同ふする能はざる處。是れ彼が俗界にありて、天眞爛熳の裸躰的となり、社界上に於ける一切の健設的腦髓に乏しく、頓て嬰兒の如くに無邪氣なる所以と知らずや。

◎吾人が詩人と相對する時、彼が口角より常に或る光明と或る秘密を語るが如く、嬰兒が無邪氣なる無意識なる遊戯は、亦た其光明と秘密とを屢々吾人に敎ゆるなり。

◎嬰兒は天童なり、天使なり。其の薔薇のごとき麗はしき頰、漆を點せしが如き鮮かなる瞳、眞珠の貝を並べたらむ如き可愛き齒と、そを寛く掩へる花の唇、漏るゝ言葉は鈴の音か、罪なき笑波は春の漣か、他愛なきの擧動と無意識の行爲とは、鬼の心にも尙且つ微動を生ぜしむるにあらずや。況んや、罪惡のみを以て充されつる世と衝突し、社界を目して惡魔の巢窟を觀すると共に、一面に於て自然を愛し、無邪氣を愛し、無意識を愛する、悲觀詩人に於てをや。

◎乞ふ古人の聲を聞け。

柿の木であいて答ふる小僧かな

つゆの玉つまむで見たる童かな

とし問へば片手出す子や衣かへ

わんぱくや縛られながら呼ぶ螢

初瓜を引さらまへて寢た子かな

◎彼は現世を目して、魔界と斷ぜし詩人なり。總てのものを拒絶して。

何のその百萬石も笹の露

と遣つて除けし悲觀詩人なり、而も彼は一切を拒絶して、唯だ一つの或る者に執着しぬ。或る者とは何ぞ、曰く無邪氣なり裸躰なり、嬰兒なり。是れ豈二者が多くの面に於て、太だしく相密接せるが故にあらずや。

作者と細工師

◎細工師も作者の一人なり。工夫するが故なり、捻ねくるが故なり、彼れは斯うして、此れを彼して、而して作るが故なり。

◎馬琴は細工師なり。西鶴は然らず。

◎景樹は細工師なり。西行は然らず。

◎蕪村は細工師なり。芭蕉は然らず。

◎詩人は細工師たるの要なきなり。

折々草

花咲くや此處に一つの惡所が御坐る

耳そばてゝ牡丹の花下に眠る猫

墓の松時雨のくものなびきけり

聞き得たり或る夜菩提寺に秋の聲

あさゝむみ塵つかのぞく烏かな

禪僧のまどよりのぞく時雨かな

露のおと和尚は瞑目してありき

主義と看板

◎主義は恰も、ヤシ的の看板の如し。看板に虚多し。牛頭を掲ぐる金看板の裏面には、得手狗肉を賣るものあるを知らざる可らず。

◎餘りに名の美しき主義の下には、美しき方法は演ぜられざるものなり。世の中には、己が野心を行はん爲め、其の方便として、柄にもなき金看板に、正直なる人民を誤らしめんとする羽織ゴロあり。

◎社界よ、乞ふ、彼等の擔き回りつゝある、美しき主義に耳を貸す勿れ。唯た其の方法の如何に注目せよ。

◎由來、彼等の主義や、主義を行はん爲めの主義にあらずして、方法を演せん爲めの主義なるのみ。既に彼等の目的や主義にあらず、何ぞ主義の如何を問ふの要あらむや。

初雪の底を
叩けば
竹の月　燕村

不當の讃辭

◎ポープの曰く、

不當の讃辭は、

假面を冠れる誹謗なり。

◎一日の長者に逢へば、直に不當の讃辭を呈し、以て其意を迎えんとす。而かも、假面を冠れる誹謗なるを知らず、呈せられしものも密かに以て我が意を得たりとなす。愚の極ならずや。

◎貴郎に惚れたと公言する女の、眞に惚れし例なきがごとく、不當の讃辭を呈するものに、眞の敬意を表せるは、斷じてあらず。

◎私心を有するものにあらざる限りは、不當の讃辭を巧みにする能はざるなり。此の徒や、弱者に對つては鬼の如く、强者に向つては婦女の如きなるもの。慾の前に跪きて、動もすれば眷族の腹をも蹴りかねまじき者、醜遂ひに掩ふべからず。

◎此の徒と同臭同罪なるは、世の操觚者を以て自から任する者が、古人を描くにあたり、徒らに不當の讃辭を連ねて、文を飾ることとなり、彼や眞率に古人を描しにあらず、文を賣らんとするなり。昔への英雄豪傑を後世に照會せんとするにあらず、文を舞はしてパンにかへんとするなり。故に滿卷唯だ華麗と誇大の外に出でず

◎古人若し要あらば、當に地下に苦笑すべきなり。

痔せ蛙
まけろな
一茶これにあり　一茶

裝飾と罪惡

◎露骨、卑む可か。裝飾、貴ぶ可か。

◎俳人一茶の曰く、

人を取る芽は慥かに美しみき。

◎美裝せずんば、毒芽は人の手に觸れざるなり。裝飾は一面に於て、虛を語る、假面を語る、詐欺を語る、罪惡を語る。

◎假裝せる社界は、怡も醜面の婦人の如し。一度その粉飾を洗ひ去れば、菊石面なり、蔭口を利くものなり。信者を裝へるものに、豈に眞の信者あらむや。

◎願くば今少しく露骨なれ。庶幾は以て、罪悪の幾分を滅し得む乎。

春雨に

大欠伸する

美人かな　一茶

社界と半可通

◎擧世、何ぞ夫れ半可通の多き。

◎洋行歸りの若紳士は、髪に香油を塗りて通がり。政治の半可通は有志と化く。

◎自から通がりし連中に、通人ありし例なし。味噌の味噌臭き、由來上味噌に非ず。

◎而かも、社界をして腐敗に導く大なる原動力は、彼等半可通によれるには非ざる乎。

◎音樂を亂すものは、音樂の半可通なり。日本社界の秩序を亂さ

んとするもの、抑も是れ誰の罪ぞ。

◎吾人は歳々、此の半可通の卵の、殖え行くを悲しむものなり。

鶯のさしつ
かましき
初音かな

蕪村

兩面の偏執

◎外に在りては君子、内にありては悪魔なる人あり。外にありては悪魔、内にありては君子なる人あり。共に偏執なり。

◎夫れ偏執なりと云へども、吾人は寧ろ、外に在りて悪魔、内に在りて君子なる人に同情を寄す。

◎偏執は社界が餘儀なくせしめたるもの。解剖し來れば、一面の眞理あり、一面の主張あり、觀念あり、信仰あり。八方美人の如才なく立ち廻る社界には、一方面の偏執は、屢々警鐘者として現はるゝなり。一包の興奮劑として少なからぬ刺撃を與ふる

なり。若し、偏執なる主張と信仰とを以て、時に大打擊を加ふるなくんば、社界は餘りに如才なく、餘りに悧好に、餘りにおべッか多く、餘りに婦女子化せんのみ。而して、後者は前者よりも偉大に、强固に、且つ主張の多くを含めばなり。

◎ダンテ一派の悲觀詩人を見よ。其の社界に對する聲や、狂犬のごとく、狼豺のごとく、動もすれば、人を嚙まんとするものあると共に他面に於いては、甚だ温乎として親しむべきものあり き。

◎前者は、其の意義、其の思想、共に薄弱を免れず。內に在りて惡魔、外に在りて君子なりし偉人の名は、吾人未だ曾つて聞かざるなり。

破鐘の響も
あつし夏の月　北枝

不義と矛楯

◎ホコトンは、現日本の一名物なり。

◎名物に碌なものなし。吾人は今、家庭制度より來るホコトンの一を示さん爲め、更らに俗謠子を借んかな。

◎俗謠子曰く、

手と手と手と手と、重なり合て、
身の徒づらにはいつかなる

お嬢様の戀は、此時よりして既に成立す。而かも、不義は御家の御禁物と云ふ。

◎戀を以て不義と目す可くんば、戀歌を以て充されつる百人首は、悉く是れ不義の塊物にあらずや。不義を以て御家の御禁物と云はゞ、百人首は是れ大々的禁物ならざる可からざるにあらずや。然らずんば此等の制度は、矛盾なり、撞着なり、自家衝突なり。

春雨や
小磯の小貝
ぬるゝ程　蕪村

希望と人生

◎希望は人生の花なり。

◎希望なきの人生は、死せる人生なり。而かも、希望は達せられざるに於て、幾多の趣味あり。

◎俗謠子の曰く、

枝垂れ柳に櫻を咲かせ、
梅の香を持たせたい。

◎目して以て、極樂淨土となすもの、是れにあらずや、黃金世界となすもの、是れにあらずや。

◎俳人越人の句あり。

花に埋れて夢より直に死なん哉。

◎吾人は唯だ、希望に死せんことを希ふ。理想に死せんことを希ふ。花に埋れて、夢より直に死せんことを希ふ。

◎戀も亦た、人生希望の一なり。達せんとするに於て花となり、達するに於て何物もなし。吾人が希望の總てを果せる時、吾人は既に苦樂以外のものと成り了れるごとく、戀の總てを達せるとき、吾人は全く戀愛以外のものと成り了れるなり。

◎希望は夫れ、人生以下の花なり。人生以上にあつては、彼は遂に無意義に屬す。

薄情と才子

◎なまなかなる同情は、殺人罪を意味す。

◎俗謠子の曰く

懸けて宜いのは衣桁に小袖、
かけてたもるな薄情け。

◎人生悲觀の大半、視來れば、孰れか此の薄情けに基かざるものぞ。

◎自己が襠の裙に迷はして、野呂息子を殺さんとするもの、是れ女郎の薄情にあらずや。

自己が巧みの弄舌に委して、純潔なる少女を殺さんとするもの、是れ才子の薄情にあらずや。

◎彼等は或る意味に於て、薄情てふ技藝專賣權の一を有するものなり。

◎而かも、女郎や才子や素と是れ市井の一匹夫、深く論ずるに足らずと云へども、此の厭ふ可き潮流は、將た社界の多方面を侵さんとせるにはあらざる無き乎。

◎自由を衒ふ大束縛家は、今や滿天下を横行せり。正義を口にする僞善者は、今や社界到る處に濶歩せり。彼等は云ふまでも無く、薄情の下に、正直なる人民を殺さんとするものなり。

◎吾人は、全日本を擧つて、女郎化し、才子化せんとするを悲む。

花の香や
嵯峨の燈
消ゆるころ

蕪村

時間と議論

◎議論は世と共に押移る。主義は須く終始一貫なるべし。方法は場所と時間によつて異ならざるを得ず。

◎時によつて軍備を擴張せよと云ひ、時によつて軍備を收縮せよと云ふ。主義は國家を保つにありと云へども、時間によつて方法は異なれり。是れ、云ふものに二枚の舌あるにあらず、時勢に前後の別あればなり。

吾人は、國家主義者が個人主義者と握手するを怪まず、唯佛論者が唯神論者と接吻するを怪まず。然かも、自己が主義信仰を

捨てゝ、無意義にも他の軍門に降るに於ては、是れ主義の賊ならずして何ぞ、信仰の賊ならずして何ぞ。

夏山や

庶を見かけて

二　曲　曲水

汝に問ふ

◎人は己れ自身を知ること最も少し。とシセロは云へり。

◎自身を知つて、全世界を知らざるものあり。全世界を知つて、自身を知らざるものは更らに多し。と他の西哲は云へり。

◎智は睫の如し、能く百歩の外を見て、自から其の睫を見ず、と韓退之は云へり。

◎吾人は、世の哲學者に向つて高義ある宇宙の理を問んとするものにあらず、世の宗教家に向つて深遠なる教理を叩んとするものにあらず、對外硬者に向つて東亞の大勢を聞んとするものに

あらず。

汝に問ふ、乞ふ汝自身を吾に語れ。

夕立は繪に

かく雨の姿哉　　桃隣

偉人と無我

◎云はざるに云ひ、言ふに言はず。是れ果して、策士の六韜三略乎。

◎家康一流を英雄の看板と崇拜するものは、未だ眞の偉人を以つて目すべからざるなり。

◎偉人とは必竟、天眞爛熳たる精神の、宇宙と同化せるを云ふなり。總てのものを映ずべき無我の、天地と調和せるを謂ふなり。

人生と直線

◎人間は素と秘密なるべきものにあらず、公明なるべきものなり。裝飾すべきものにあらず、露骨なるべきものなり。

◎直線は能く人間の行路を示す。曲線は後世策士や才子が、假造したる人間外の路のみ。

二もとの
梅に遲速なし
賞すかな

蕪村

處世術と詐欺

◎罪惡を以て掩はれたる社會にあつては、處世術とは詐欺を意味す。

◎胡麻摺ることの上手にならぬ間は、此の世は渡られぬなり。表に笑みを湛へて、內に怒を潛め得るの人にあらざるよりは、此の世に處する能はざるなり。眞面目に生涯を了らんとするものは、先づ去つて、宗教家となれ、村夫子となれ。

◎處世術は詐欺を語る。而かも、處世術の下手は、到る處の獄屋にあり。

偶然と滑稽

◎人事は總て、必然なるべくして必然ならず、眞面目なるべくして眞面目ならず。

◎既に必然ならず、眞面目ならず。故に偶然なり、案外なり、唯だ夫れ滑稽なるなり。

◎噫、滑稽か。何ぞ夫れ、滑稽を以て包まれたる血と泪との多き耶。

◎美くしき名の下に、穢なきことを目論見つる有志者あり、紳士あり、政治家あり、文士あり、軍人あり。世間滔々斯の如し。

紅粉を以て裝ひたる娼婦と、何ぞ異ならむ。

◎噫、笑ふべきか、泣くべきか。泣くべきか、笑ふべきか。吾人は餘りに滑稽の多きに堪ふる能はざるなり。

花咲くや
京の女の
頬冠り
一　茶

青史と英雄

◎英雄とは必竟、何人も制し得べからざる程、殺人罪を犯せしものゝ謂乎。

◎一人を殺すものは、悪人を以て目せられ、數百萬人を殺すものは、大なる名譽を以て迎えらる。上帝、何んぞ、罪の小きものに酷にして、大賊子に寛なるの太だしき。

◎英雄をして果して斯くの如きものならしめば、青史とは僅かにペーリーの所謂「只だ權勢を爭ふ人々の成巧、失望、悪德、痴事、爭論の記錄」に過ぎざるなり。

姦說と格言

◎姦說、未だ始めより姦說なるにあらず。格言、未だ始めより格言なるにあらず。唯だ是れを捉へ來るの人によつて、姦說となり、格言となるのみ。

◎呂東萊の曰く、大誥之篇、入王莽之筆、則爲姦說。陽虎之語、編孟子之書、則爲格言。

◎小人は君子の格言を盜んで、姦說をなし、君子は小人の姦說を捉へて、格言を爲す。言や同じ、人によつて則ち分る。姦說と格言とは、一種の以心傳心なり。

服從と獨立

◎似而非なるものあり。善と僞善、信仰と迷信、奸と智、暴と勇、孤獨と獨立、服從と奴隷、於戲何ぞ相似て相去るの甚だしき。

◎善とは僞善を云ふにあらず、信仰とは迷信を云ふにあらず。智とは奸を云ふにあらず。勇と獨立と服從、如何ぞ暴と孤獨と奴隷とを意味せむ。

◎男らしき服從は、男らしき獨立にして、男らしき信任は、男らしき自信なるを思へ。ウヲーツヴヲースも、亦た訓むる處ありしにあらずや。

使者と被使者

◎使ふ可し、使はるべからずとは、吾人が情慾に對する憲法の第一義なり。

◎吾人若し夫れ、情を以て吾人の神となさば、吾人は情と共に心中せざる可らざるにあらずや。金錢を以て唯一の寶とせば、金錢は惡魔の如く、吾人を惱すべきなり。

◎拜金宗とは、巧に蓄財するものゝみの謂にはあらず、生涯を黃金の爲めに使はれつるものを謂ふなり。菊造りにして、菊の奴ならざるもの幾許ぞ。

◎使ふべし、使はるべからず。吾人は情慾以外、猶ほ斯く絶叫せんとす。

五位六位

色こきまぜよ

青すだれ

嵐雪

飲食と生活

◎世に、飲食せんが爲めに生活しつゝある、愚者あり。

◎妓を聘せずんば、何々の會は成立せざるなり。幇間を招かずんば、某々の宴は成立せざるなり。此際にあつてや、下卑たる俗歌、淫猥なる端唄は、唯一の歡呼を以て迎えらる。何々の會をなさんか爲めに、妓を聘せしにあらず、妓を聘せんか爲めに、何々の層をなせしなり。是れ、飲食せんか爲めに生活せると、其の愚孰れぞ。

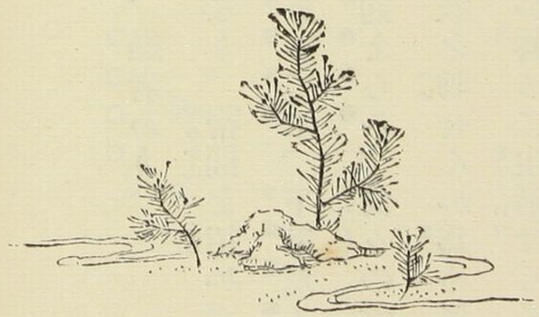
◎然かも、其の愚や笑ふべからず。世間滔々、下卑なる流行病に

耀はるに於ては、心あるもの少しく思ふ所なかる可からざるなり。

さらくと

清水に松の

古葉かな



過、過を産む

◎未だ始より過の大なるものは寡し。過を掩はんとして、過更らに過を産む。過愈よ大にして、之を改むるの機を失し、遂ひに如何ともすべからざるに到る、比々皆な然り。

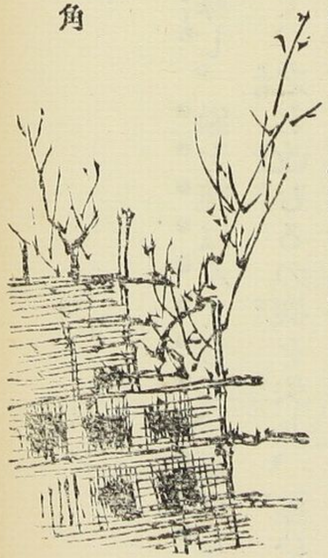
◎悔悟は天が人類に附與せる、美徳の一なり。吾人をして最初に、過を自告せしめよ。左らば、罪の幾分をつくなふを得ん。

造化の妙

◎毒を毒とするなかれ。願くば百藥の長たらしめよ。

◎造化の抄は、天が萬物に附與したる處。毒を毒として用うるは、庸醫のことのみ。曾つて熊を温めし毛皮は、今や帝王を温むるの毛皮なるを思はざる可らず。

行水や
何にとゞまる
海苔の味
其角



平民の進歩

◎文明の程度は、印刷機械塲盛衰の如何に存せり。

◎試みに統計表に據つて、世界各國の印刷紙配布數を檢せよ。英と云ひ、米と云ひ、佛と云ひ、獨と云ひ、彼等は勝に一等國たる最大の配布數を有せずや。支那、朝鮮、安南、暹羅の如き、彼等は氷點以下に位するもの。

◎國の進歩とは、都府の進歩を云ふに非ず、田園の進歩を云ふなり。統御者の進歩を云ふにあらず、國民の進歩を云ふなり。貴族の進歩を云ふにあらず、平民の進歩を云ふなり。

俗謠文學

◎吾人は多くの意味に於て、俗謠を貴ぶ。

◎下卑たりとて斥くること勿れ。露骨なりとて捨ること勿れ。彼等の或るものは、拒絶すべからざる眞理を謳歌せるなり、道破せるなり。

瀧田川、無理に渡れば紅葉が散るし、
渡らにや、聞かれぬ鹿の聲。

◎優美にして、而かも千古の眞理と私語す。何等の歌か能く、此の壘を擘するものぞ。

俗僧と念佛

◎僧桃水、奇僻を以て鳴る。

◎彼は筑前鞍手の產なり。幼にして肥前島原の禪林寺に住職たり。一日瓢然去つて姿を消し、獨り江州大津の草庵に潛む。彌陀の畫に讃して曰く、

狹まくとも宿を貸すぞよ阿彌陀殿、
後生ねがふと覺召めすなよ。

◎彼が自ら好で乞食の群に投じ、破笠破簑、毫も顧ざりしの奇行を知るものは、誰れか此の短歌の眞意を解せざらむや。

◎世の凡々たる墨衣の輩。徒らに念佛を唱へ、他力によつて往生を遂げんとす。是れ、唯我獨尊の八大文字を忘却せるにあらずして、何ぞ。

寺に寐て
誠面なる
月見かな

芭蕉

奇嬌の文字

◎春風徐ろに吹いて、梅花漸く綻びんとする頃、一日根岸を逍遙す。路傍に邸墟あり。些々やかなる札に記して曰く。

犬の外小便す可からず。

◎古人を學ぶ奇嬌の文字、誰れ人の風雅なるらむ。

女神の姿

◎後陽成院の曰く、

思ひなき雲の上まで行くものは、
月見る夜半の心なりけり。

◎精神の集注する處に發するは美なり。萬眼の濺く處に現はるゝは、女神の姿なり。

折々草（其三）

コツ〳〵と桶屋の町の夜寒かな
大根引いて庫裡に持ち行く男哉
大佛のお眼の光りや秋の風
或る虫の覗いて見たり今日の月
芋堀るべく僕は行きぬ後の月
鬼にやみつかれけり森の骨
木枯や新街道を狐ゆく
木枯のなかに少さき我家哉
木枯に古井戸の水最と深し
木枯の峠に僧の起ちけるよ
酒樽に不二の雪とある沼津哉

霜の朝水夫船掾を渡りけり

捨鐘を忘れて撞くや霜の夜

敵營に篝火消えて霜十里

霜の夜や我庵ちかく狐なく

我庵は狂句に似たり年の暮

浪人の口のみ強し年の暮

溪聲水韻

清風枝を撫でゝ、松の聲は起り、溪水岩を廻りて、水の聲は起る。松聲か、水聲か。何の處か、涼味最も掬すべきぞ。

芭蕉の句に曰く、

涼しさを繪に寫しけり嵯峨の竹

若竹の新月に靡く樣を繪にしたるさへ、既に涼味あり。況んや足親しく嵯峨野の綠蔭を辿り、古墳壘々、青苔爛班たるほとり、一椀の澁茶を掬して、靜かに昔へを回顧するに於てをや。清涼云ふべからざるものあらむ。

又た曰く、

月はあれど留守の樣なり須磨の夏

淡路島通ふ波間の浦風に、苫屋が一間に端居して、青葉の笛の昔を偶ぶも、また可ならずとせず。

偕雪の曰く、

夕顏は蚊の鳴くほとの暗さ哉

撒水の滴るほとり、丸裸躰の男の姿。夕刻は寔に千金の價ありけり。

一茶の曰く、

蓮の葉にのせた樣なる庵かな

斯の如き詩趣は既に舊く、從つて涼味も淺し。

又た曰く、

湖に尻を吹かせて蟬の鳴く

左なきだに湖邊の眺望、新綠の影倒なるを望んで、左耳に蟬聲を聞く。旅程の情、此處に盡きん。

また曰く、

出よ螢 錠をおろすぞ出よ螢

露は葉末に宿り、星影は露に宿る。四顧片語なく、更くるにつれて青くさき野の匂の、身に迫り來る畔、靜かに草庵を結ぶ。叩くべきは月を友の草の庵なり。

蕪林の曰く、

夏河を越す嬉しさよ手に草履

橋を越えず、強いて迂廻して河を渉る。また一興なり。

また曰く、

涼しさや鐘を離れぬ鐘の聲

山莊の夕、鐘や涼味を撞き廣めぬ。

また曰く、

河童の戀する宿や夏の月

恙ましきは汗が宿なり。水底も時に清涼の堂と化す、奇ならずや。

支考の曰く、

涼しさや椽から足をぶら下る

コモ亦た一種の納涼ならずんばあらず。其他芭蕉には、

此のあたり目に見るもの皆な涼し

關守の宿を水鷄に問はふもの

ほとゝぎす聲横ふや水の上

等あり。いづれも涼しさの限なりかし。

松杉をほめてや

風のかほる音　　芭蕉

山莊の一日

櫻花梢を謝して、綠林影濃かならんとす。一卷の詩集を懷にして、神韻を山莊に尋ぬれば、溪流の岩に咽ぶところ、涼味湧くがごとく、杜鵑月を掠むるほとり、險聲溢れんとす。

素堂の曰く、

目に青葉、山子規、初鰹

初夏の景物、何者か是に如くものあらむ。都の紅塵に飽くものは、去つて山莊の神韻を訪ふべきなり。

古人の曰く、

ほとゝぎす〳〵とて寐入りけり

時鳥一二の橋の夜明かな

行燈を月の夜にせむ時鳥

子現啼くや潮水のさゝ濁り

蚊に食はれ蠅にさゝれて時鳥

西東啼くべき夜あり子規

子規何もなき野の家構へ

提灯の空に詮なしほとゝぎす

子規盃の四月に蚊の五月

二の聲は庵崎起えつほとゝぎす

鞘走る友切丸やほとゝぎす

忘るなよ程は雲助子規

我汝を待つこと久し子規

青葉若葉の詩趣や如何。古人の曰く、

若葉吹くサラ〳〵と雨なから
浴して若葉見に行く夕かな
不二ひとつ包み殘して若葉かな
蛟屋を出て奈良を立ゆく若葉哉
一いきれ蝶もうろつく若葉哉
桐の葉の悠々然とわかばかな
若葉して中ぶらりんの臺かな

木母寺へ

世を遁るゝや　涼み舟　柳居

雜花賣

清新なるは秋草なり。

春華は美裝せる少女の浮かれたるが如く、秋花は世を敢果なみし尼法師の經机に對へるが如し。

桔梗や如何、苅萱は如何、女郎花は如何、春華によつて、隨喜の泪を滾せしものは、秋草に對して、須く悲哀の泪を濺ぎざるべからず。

○

何事も招き果てたる芒かな　　芭蕉

菊の香や奈良には古き佛達

白菊の目に起て見る塵も無し

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

一つ家に遊女も來たり萩と月

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花

朝顔は下手の書さへ哀れなり

荻の聲こや秋風の口うつし

色つくや豆腐に落ちて薄紅葉

○

茨老ひ芒痞せ萩おほつかな

山は暮れて野は黄昏の芒哉

猪の露折りかけて女郎花

朝顔や手拭の端の藍をかこつ

蕪村

花芒一夜はなびけ武藏坊

宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ

三徑の十歩につきて蓼の花

水枯〳〵蓼かあらぬか蕎麥か否

麓なる我が蕎麥存す野分かな

白菊や吳山の雪を笠の下

寄らで過ぎる藤澤寺の紅葉哉

○

一番の不二見ところか葡萄棚

朝顔に涼しく食ふや一人めし

小雄鹿の喰ひこぼしけり萩の花

女郎花あつけらけんと立にけり

散る芒寒くなるのが目に見ゆる

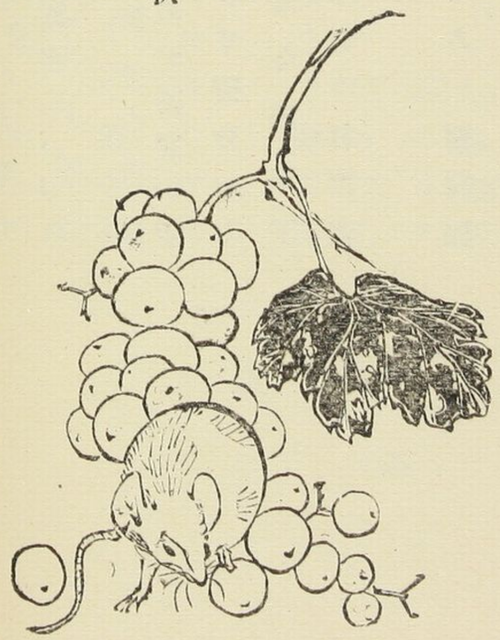
一茶

きり〳〵しやんとして咲く桔梗哉

耳に珠數かけて折ろなり草の花

露はかり
落してみたろ
葡萄かな

茂　秋



折々草（其四）

夕涼み偖て大男の小唄かな

蝶とまる結たて髪や大男

武藏野は薄はかりぞ畫の月

月明の武藏野よぎる狐かな

半面の美

科學者が、一枝の花を撮り來りて、其の纎維色素の如何を檢するごとく、吾人をして聊か、春、そのものに就き、色素の美を解剖せしめよ。

櫻さく里を眠りて通りけり　夕楓

春を組織する要素の一面は、白色なり。白は色素の根源なり。神聖を意味し、純潔を意味し、梅花を意味し、梨花を意味す。

古人の曰く、

白梅の枯木に戻る月夜かな
梨の花月に書を讀む女あり

陽春第一、春の色を示すもの、梅花にあらずや。萬華漸く笑ふのとき、密かに他の色を示すもの、梨花にあらずや。

彼や浮薄ならず、艶麗ならず。沈痛なり、眞率なり、賢を語り、眞を語り、善を語る。彼は吾人に對つて、正義の影を示さん爲めに降りし天使なり。

梅さいて
帶買ふ室の
遊女かな　蕪村

春を組織する要素の一面は、青色なり。

古人の曰く、

出る杭を打うとしたる柳哉

青柳にもたれて通す車かな

彼れ亦た浮華ならず、艶麗ならず。柔順を意味し、平和を意味し、樂天を意味す。

樂天や、平和や、柔順や、是れ彼が天より與へられし先天的の使命にして、而かも、彼が吾人に示す處の教科ならずや。

からかさに押分けみたる柳かな　芭蕉

春を組織する要素の一面は、黄色なり。

古人の曰く、

ほろ〳〵と山吹散や瀧の音

山吹や水は流れてもとの影

彼れ、徒らに浮華なり、裝飾的なり。薄命を意味し、輕薄を意味し、虚を意味し、詐欺を意味す。

小判を目して、一つに黄金色と云ふもの、頓て必衰の鐘の音に跡もなく散り行きて、敢果なの最後を語る故と知らずや。

山吹や井手を流るゝ鉋くづ　蕪村

春を組織する要素の一面は、紫色なり。

彼れや、女性を意味し、愛を意味し、戀を意味し、藤花を意味

し、菫花を意味す。

古人の曰く、

山藤の氣儘を見たるしたれ哉
堤より轉ひ落つればすみれ哉

松に蔓りて咲ける藤は、戀を語れるにあらずや。菫野を廻る女夫連、また戀を語れるにあらずや。

謙讓の德は、彼が有する唯一の美なり。菫は小女の如く、藤は婦人の如く、而かも戀愛の色や紫なり。

行く春や
紫さむる
筑波山

蕪村

春を組織する要素の一面は、紅色なり。

古人の曰く、

咲くからに見るからに花の散るからに
花散るや伽藍の樞おとし行く
紅梅は娘住ませる妻戸かな
海棠や白粉氣なき花のいろ
海棠や天窓そる子の面のいろ

既に櫻花を意味し、紅梅を意味し、海棠を意味す。紅色は同しく是れ紅色なりと云へども、類は異にするに從つて、意義また異ならざるを得ず。

山櫻の朝日に匂ふ樣は、云ふまでもなく武士が姿に似たるべきも、初櫻、遲櫻、稚兒櫻、糸櫻、彼等は遂に他を語るものなり。況んや紅梅に於ける、海棠に於ける、其の天職の自から趣を異にせるに於てをや。

然かも一轄にて云はば、紅色は薄命の意義に過ぎず。吾人が黄色に次て嫌むべきは、夫れ紅色ならむ乎。

風流と聾者

風流は、耳聾したるにあり。

花筏ぬしは聾の木椎かな

彼は風流を解せず。而かも、彼は詩中の者と化し了れるなり。

吉野川落花を乘せて筏行く

花に鐘つかねばならぬ浮世かな

明石志賀之助

笠と詩

笠、此の簡單なる一漢字は云ふべからざる詩的趣味を含む。

常盤が笠は、大和路の雪に惱み、小涙が笠は冬枯の時雨に艱む。

天の美想の降るとき、詩人が笠は何ものに顯はれつらんむ。

花に醉ふ春天無邊笠一つ

曠茫たる春の野邊、遙かなるほとりに、人は花草に隱れて、笠のみ二ッ、渦の如くに、摺れては離れつ、離れては摺れつ、長閑かに野途は廻るさま是れ詩にあらずして何ぞ。

浮つ沈みつ春の野の繪傘かな

枯野に吹き捲らるゝ破笠、哀は人生の末路也。

破笠や枯野に誰が野倒死

優美なるは奈良朝の武士なり。陣所の邊にも櫻花の二ッ三ッ。

陣笠に櫻の花や奈良の武士

笛の聲

笛は音樂なり、音樂は詩なり、如何なる笛が最も吾人を樂ましめ、如何なる笛か最も吾人を悲しましむべき。

古人句あり、

唯が家ぞ笛に落花の曲を吹く
桂魂朦朧として、花影地に敷くの宵、吹くは唯が家の玉笛ならむ。

嚠々たる音の花間に響くは、哀れなる戀の心を、懷しき人の枕邊に送るにはあらざる乎。また曰く、

笛の音に波も寄り來る須磨の秋

青葉ヶ笛なつかしとや。秋は悲しき須磨の月、昔偲ぶの色や詩なり。

輝に笛つきたてゝ星迎え

一茶が句は、寧ろ滑稽に類すと云ふべし。樹水には、

鹿笛の上手を盡す哀れさよ

花の蔭

天夢櫻魂に入り、春は今や美裝せんとす。詩人がこれに對する觀美との情操、夫れ如何に動くべきか。

高下駄で濡れて來るなり花の使者

無情の人は有情の花を撮りて、徒らに己が學識を殖んとす。是れ科學者なり。

花折つて學舍に持ち行く男かな

宗教家の眼に映ずべき春や如何。

花散りて腐れ繩など懸りたる

花影滿地の處、吾人は偶々美的哲理を發見す、若し夫れ艶麗なる花間を過るに、眼一度び流水に濺かば、何人か悵然として、首肯せざらむや。

花影の水は無心に流れ行く

梨花

總じて、春の花は艶麗なり。桃、櫻、梅棠美人が頰にも例へつべく、獨り梨花の淋しく沈けたるは何ぞ。

吾等は或る意味に於て梨花を賞す。醉ゑるが如き春花の間にあつて、梨花はひとり能く吾等に警鐘を與ふればなり。

都路や三里離れて梨の花
花賣りの眺めて行きぬ梨の花

枯柳と青柳

枯れ柳、青柳、柳は素の柳なから、偖ても詩趣の異なりたるものかな。

庭の青柳は、池の面を鏡に春風に梳り、川沿の枯柳は、情死の名殘りとなりて、長へに鬼氣を宿す。

古井戸に星の落ちけり枯柳。

柳煙る長堤十里蝶一つ。

花に狂ふ蝶の、門を違へて、横さまに振られたる樣、興なからずやは、

青柳に蝶止まらんとして振られけり。

川沿の青柳、無心の水、美的哲理は千古の眞理を私語せり。

青柳の招けど行くや利根の川

遊女と山吹

山吹の花、何ぞ夫れ遊女の情と相似たる。

表に黄金色を浮ばせ、崩るゝばかりに咲き亂れて、巧みに人心を動さんと勉む。左りながら、散りての後は、何の果をも結ばざるなり。

彼を一つに面影草と云ふもの、是れ正に遊女が情けと相似たるが故にあらずや。

葬儀

葬儀は人生最終の曲線なり。

古人の曰く、

浮世の月見過にけり末に年

借問す、圓滿に人生五十年を終りたるもの、幾許かある。

或は後半生を破菰の裡に包み、或は枯野の果に烏の餌となり、悲哀に失意に墮落に、身は一個の卒塔婆と化するもの、比々皆な然るにあらずや。

更らに、純潔なる小女にして、生涯祝言の盃を口にせず、失意の

感に消え行くものあるに到つては、是れ何等斷腸の悲劇ぞ。

春雨に葬儀の花の濡れて行く

葬儀は蕭々として雨中を練り行きぬ。濡れ行く花は彼の女の面影なり。試みに想へ、彼の女の葬儀は、抑も何を語れるかを。

青麥

麥丘幾段、春の半面は必ずや青なり。

百姓の衣は黒く麥青し

見亘すばかり青々たる麥穂の上に飛び行く胡蝶の一つ。彼は抑も何を訪ねんとやする。散り行きし花の影をか、見失なへる雌蝶の姿をか。想ふに、彼の戀も亦た苦しからずや。

青麥の上や雄蝶の獨り旅

双紙を鎧に、棒を太刀に、腕白盛りの戰ゴッコに、青麥の倒れしも哀れなり。

三々伍々學校歸りや麥畑

麥拔いて笛造りたる生徒かな

偉人の片影

偉人は恒に世外に超然たり。

神州八十餘州の風潮外に屹然として濶歩し、恒に勇壯なる思想を吾人に與ふるもの、不二山は實に東極の一偉人たらずや。

春風以外三千丈の富嶽かな

秋風吹けども其の峰を越さず、春風徒らに其の腰を廻るのみ。彼は天外の消息を傳ふるものなり。

風めぐり星飛び越えぬ夏の富士

富士消えて夕立駿河に下りけり

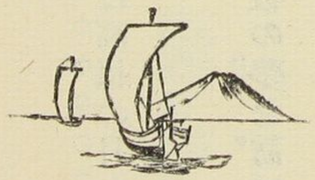
花散り葉落ちて、卵塔の間徒らに卒塔婆のみ黑く、吾人が或る一種の悲觀に駈られて、夕暮菩提寺畔を逍遙するとき、夕陽の空を暈る彼は、抑も何をか語る。

墓原より詩人眺めぬ秋の不二

降るさても
空のもの也

富士の雪

永機



夢

夢は人生の樂境なり。小女は意中の戀人を夢み、僧は高根の月を夢む。

刷一重、野の果てに眠るは、誰が家の娘ぞ。胡蝶が彼の夢を訪はんとするとき、有心か、霞は巧みに彼を遮りぬ。

菜の花や霞ぞ夢の幕を張る

人生五十、觀じ來れば一夢に過ぎず。

花に眠て月に醒め行く夢路哉

春雨

秋雨は蕭條、春雨は濛々。淋しき人の泪、是れ秋雨の蕭條たるに似、無邪氣なる小女が笑靨の唇、是れ春雨の濛々たるに似たらずや。

裏二階春雨唄ふ女かな

細雨見越の松を掠めて、四顧喃語なく、折から漏るゝ徒然の糸は見る影もなき留守居の媼の、ありし昔を偲ぶとや。

春の雨留守居の婆が三味を彈く

嵯峨野あたりの繫ぎ馬、主は奥の間深うして、偖ても床しきこと

共なんめり。

白馬鞍上櫻ぬれけり春の雨

柳は暗く花は明かに、平安七條の雨や如何。

春雨濛々三十六峯明又暗

哀れなるは廓なりけり。辻占買ふて情夫まつもいぢらしや。

傾城の辻占買ふや春の雨

春風

秋風は法師が墨衣を吹き、春風は小女が赤き裙をかへす。秋風は冷たく、春風は暖かなり。

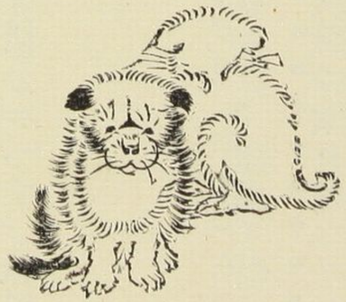
春風や　褌赤き船頭殿

花は紅、柳は緑、妙齢の小女、春水を渉るあらば、達磨も時に亦た此方向かざらむや。左りながら、西舍に秋風の吹き落つる時、彼が微笑の面影は遂に亦た見るを得ざるなり。

此方君いて春風に笑ふ達磨かな

美化と云ふことあらば、是も其類にや。

春風に蓆帆かけし小舟かな
春風の撫て行きけり乞食小屋



春宵

春の夜は靜かに、秋の夜は寂たり。
寐醒の法師が心を、秋の夜とすれば、春の夜は、夫れ純潔なる小女が夢路に似たる哉。

春宵を笑ひ興ずる小女かな
昔偲ぶ嵯峨野の春宵や如何。
端居して謠曲うたふや春の宵

○

おぼろなる夜を公達の忍び行く

折々草　其五

俊寛が歸帆ながむる暮秋かな
春雨に甚五郎が猫も眠るべう
高德が矢立の上や散る櫻
時雨るゝや太閤貧寺に味噌を摺る
一休は白骨叩きて花見かな
煤はきや花嫁御寮の頰冠り
大兵の頰冠りして年の市

教訓的俳句

文學は必ずしも勸善懲惡ならざる可からず、と云ふの道理なきが如く、教訓的の意義を含めると否とによつて、俳そのものゝ文學上に於ける價値を動かすことは得ざるなり。然れども、自己の理想に綜合せる美的哲理を捉へ來つて、是を俳中にほのめかすこと、作者の一條件ならずんばあらず。

芭蕉は最も多く、此の手段を取りぬ。

ながき日を囀り足らぬ雲雀かな　芭蕉

國事多端の際、徒らに蝸牛角上の爭のみに日も亦た足らず、邦

家の大事を他所にする政論家をも訓むるに足る。

蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲　芭蕉

嗚呼若し美裝せる娼婦、軍帽を戴ける幇間、信者顔せる大不信者あらば、彼等は蛇を喰ふの雉子ならずや。

頓て死ぬ氣色は見えず蟬の聲　芭蕉

人生僅かに五十、一夢に過ぎず。而かも猶ほ且つ情慾を充すに日も亦た足らず。彼は何が爲めに爾く罪惡を重ねつゝあるか。訝しきの限りなるなり。

露とくゝ試に浮世すゝがはや　芭蕉

眼を放ては即ち五情、眼を閉づれば則ち六慾。社界は罪惡の叢となり了して、殆んど濁流の如し。吾人は堪ふる能はざるなり。

道端の木槿は馬に喰はれけり　芭蕉

出る杭は打たれ、減らず口は憎まる。能ある鷹は爪かくさゞる可らず。

白露の淋しき味を忘るゝな　芭蕉

淋しさを悟らざるものは、天堂を知り得ざるの不幸兒なり。而かも、露の美は、其の淋しき處に於て存す。

もの云へば唇寒し秋の風　芭蕉

河豚汁や鯛もあるのに無分別　仝

一は、沐猴にして冠するものを訓め、他は、君子危きに近寄らざ

るを説く。

稲妻や昨日は東今日は西　其角

政論家の本領なきこと、今日より甚だしきはなし。個人主義者忽ちにして、國家主義者と變し、自由主義の本尊忽ちにして、藩閥内閣の奴隷となる。無定見の骨頂か、變通の妙か、何んぞ夫れ轉變の甚だしき。

大原や蝶も出て舞ふ朧月　丈草

更老けて、梅ゞ香は密かに美人が手枕に通ひ。朧なる夜、蝶は出でゝ花の香に舞ふ。蓋し是れ一種の宗教なり。

出る杭を打うとしたる柳かな　蕪村

是れ芭蕉が木槿と同趣味の教訓にして、

妹が垣根三味線草の花咲きぬ
屁ひり虫爺々が垣根と知られ鳥　蕪村　一茶

は共に或る哲理を語る。

獨鈷鎌首水かけ論の蛙かな　蕪村

蛙を捉へ來つて、露骨に人生を諷し。

秋來ぬと合點させたる嘘かな　蕪村

秋風落葉を弄びて、寒さ骨に徹す。秋は悲哀の影を吾人に示すなり。

菊造り汝は菊の奴かな　蕪村

情を弄ぶにあらず、情より弄ばるゝなり。黄金を弄ぶにあらず、黄金より弄ばるゝなり。是れ情の奴隷、黄金の奴隷ならずして何ぞ。

初雪の底を叩けば竹の月　　蕪村

枯野の溜り水に、眞如の月は宿り。葉未の露に、眞理の影は差す凡骨は徒らに、初雪の美を見て、未だ其の底に、竹の月てふ美的哲理の宿れるを知る能はざるなり。

落る時落てし椿の一期哉　　舊國

恰も夫れ、勇士が最後に似たり。死を全うせしものは、夫によつて得る報酬は眞價値以上に至るものなり。

親は死ね子は死ね後で孫は死ね　　一茶

祝意を意味するなり。一茶何ぞ瓢逸なる。

泣くな虫默つて居ても一期也　　一茶

行くな雁何處も茨の浮世ぞや　　仝

共に邪界の到底救ふべからざるを語り、

善盡し美を盡しても罌粟の花　　一茶

長歌三月響き、短舞萬人に賞せらるゝ蛾眉の女も、西舍に秋風落ち來らば、甘蔗の滓となり了するを云ふ。芙蓉は寒に耐へざるなり。

影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩き　　一茶

若法師の行爲を訓め、

人の夜は月も惱ませ給ひけり　一茶

は

下界の汚れたるを謠ひ

出てや否や蚯蚓は蟻に引れけり　一茶

蛇も入る穴は持つそよ鈍太郎　仝

共に與太郎を謠ふ。其他擧げ來れば、數限りもあらざるなり。

みゝつくは眠る處を刺れけり　半殘

分限者に成りたくば秋の夕暮をも捨てよ　農夫

子に飽と申す人には花もなし　芭蕉

恥かしや糸爪は糸爪のやくに立つ　一茶

四季の月

春の夜の月は、初心なる小女の恥を含んで微笑むが如く、夏の夜の月は、婀娜たる女の湯浴姿にも例ふべく、女神の姿は、秋の夜に現はれ、冬の月は、老女の化粧に比す。

月は一つに、四季折り〳〵の眺め、偖ても異なるものかな。

○春月

大原や蝶も出て舞ふ朧月　丈草

朧とは松の黑さに月夜哉　其角

朧月まだ離されぬ頭巾哉　仙花

禿げ山や朧の月の住み所　或之

海棠の花は充ちたり夜の月　普船
つい其處の二文渡しや春の月　一茶
春月や印金堂の木の間より　蕪村
よき人を宿す小家や朧月

○夏月

河童の戀する宿や夏の月　蕪村
夜水とる里人の聲や夏の月　里圃
夜涼や向への見世は月が差す　聽雪
馬かへて後れたりけり夏の月　芭蕉
蛸壺やはかなき夢を夏の月
月はあれど留守の樣なり須磨の夏
夏の月御油より出て赤阪や　一茶
なぐさみに藁を打なり夏の月

佐保姫の御子も出たまへ夏の月

○秋月

月天心貧しき町を通りけり　蕪村
明月や兎の渡る諏訪の湖
月今宵あるしの翁舞ひ出よ
名月や夜は人住ぬ峯の茶屋
花守は野守に劣る今日の月
名月や神泉苑の魚躍る　越人
山寺に米つく程の月夜かな　曾良
雨にれて竹おきかへる月見哉　梅舌
輕々と笹の上行く月夜かな　昌碧
明月やかい突き立て繫く舟　胡及
明月や下戸と下戸との睦しき

三日月に簷の頭を隱しけり　之道
芭蕉葉や打ちかへし行く月の影　乙州
名月や椽取り廻す黍のから　去來
もち潮の橋の低さよ今日の月　利牛
名月や長屋の蔭を人の行く　闇指
明月や寐ぬ所には門しめず　風國
芥子蒔と畑まて行んん月見哉　空牙
げにや月間口千金の通り町　芭蕉
名月の出るや五十一ケ條
馬に寐て殘夢月遠し茶の煙
座頭かと人に見られて月夜哉
月影や四門入宗も只だ一つ
三井寺の門叩かはや今日の月

名月や門に差し來る潮かしら　一茶
明月や池を廻りて夜もすがら
明月の御覽の通りの屑屋哉
名月のサッサと急きたまふ哉
名月や先は貴所も御安全
名月や蟹も平家を名乘り出で
山里は汁の中まで明月ぞ
何の月年は十三そこら哉
人の世は月も惱ませ給ひ鬼
むし立の栗名月の座敷かな

○冬月

荒猫の駈け出す軒や冬の月　丈草
襟卷に首引入れて冬の月　杉風

喰ものや門賣りあるく冬の月　里圃

あさ漬の大根洗ふ月夜かな　俊似

此の木戸や錠のさしれて冬の月　其角

寒月や門よき寺の天高し　蕪村

寒月や枯木の中の竹三竿

霜百里舟中に我れ月を領す

牙寒き梁の月の鼠かな

寒月や衆徒の群議の過て後

明月や　希因

風さへ

見えて花芒

案山子先生

滑稽なるは案山子なり。

田畑幾段、身一つに頼まれて、弓箭もつ武士の、本名は何とか云ふらむ。

蕪村句あり。

姓名は何子號は案山子かな

偶には、狩人とも見らるべし。

姨捨は彼れに候と案山子哉

霜降る夜には、これも武士の情けとや。

一茶

乳呑子の風よけに起つ案山子哉　一茶

野は枯れ果てゝ、秋も暮れなんころは、遠かの武士も、身に寒きを覺ゆへし。

秋風の動かして行く案山子哉　蕪村

敢果きは武士の末路なり。

水風呂の下や案山子の身の終　丈草

其他には、

秋の暮案山子に化し狐かな　蕪村

水落ちて細脛高き案山子哉

三輪の田に頭巾着て居る案山子哉

御所柿に頼まれ顔の案山子かな　凡兆

物の音獨り倒るゝ案山子かな　一泉

田と畑を獨りに頼む案山子哉　一茶

人は爭ざ直な案山子もなかり鳧

照る月をかこち顔なる案山子哉　正秀

薪ともならで朽ぬる案山子かな　破笠

乞食にも斯うはなられぬ案山子哉　支考

一俵も取らで案山子の弓矢かな　温故

山里は鷲にとらるゝ案山子かな

誰が畑ぞ案山子の腰の忘れ鎌　孫草

更科の道向ふにも案山子かな　柳居

松風の　芭蕉
軒をめくりて
秋暮れぬ

猿と俳句

一見看破し得らるゝ浅さ智恵の。浅間敷ところに、また愛嬌あり。

木の猿や蚤を飛せる犬の上　一茶

蚤を放ちて、密かに犬を愚弄す。猿には猿だけの技倆ありと云ふべし。

澁柿や一口は喰ふ猿の面　芭蕉

澁相な面付きも可笑かるべく、

猿も木に登り濟すや年の暮　車來

人に似て猿も手を組む秋の風　珍碩

前者は乙に濟し、後者は思案に呉るゝ。

猿殿の夜寒問ひ行く兎かな　蕪村

此時や恐悦斜めならざるべく、

春風に猿も親子の湯治かな　一茶

もをかしく、

其他

山蔭や猿の尻抓く冬日向　コ谷

猿曳は猿の小袖を砧かな　芭蕉

猿曳の猿と世を經る秋の月　沾圃

猿蓑にもたれて霜の松露哉　芭蕉

初時雨猿も小簑を欲氣なり　芭蕉

年々や猿に着せたる猿の面　芭蕉

此村の人は猿なり冬木立　蕪村

軒近き岩梨折るな猿の足　千邦

猿樂に入らで哀や猿廻し　巴静

鞦韆のたはむれはやせ猿廻　かしく

等、選り出さば澤山あるべし。

狐と俳句

俳中、狐を最も多く慣用せしは天明の蕪村なり。其の凄絶たるものには、

狐火や髑髏に雨のたまる夜に

狐火の燃えつくばかり枯尾花

草枯れて狐の飛脚通りけり

可愛きは

小狐の何にむせけむ小萩原

公達に狐化けたり春のよひ

此の外左の如きもあり。

狐火や何處河内の麥はたけ

蘭の夕狐のくれし奇楠を炷む

石を打つ狐守夜のきぬた哉

麥秋や狐の退かぬ小百姓

芭蕉も亦た彼を捉へ來つて俳をなせり。

初午に狐のそりし頭かな

闇の夜や狐下はふ玉眞桑

外に二三あり。一茶の、

花の世を無官の狐啼きにけり

は集中秀吟の一なるべく、凡兆の、

初午に子供あそばす狐かな

なか〳〵に愛嬌あり。史邦には、

川べりに狐火たつや入梅のはれ

鼠と俳句

二三散見せしものゝ内に於て、稍や秀れたるは、

年寄れば鼠も引かぬ寒かな　園女

氷る燈の油うかゞふ鼠かな　蕪村

牙寒き梁の月のねつみかな　同

時雨るゝや鼠の渡る琴の上　同

鼠ども出立の芋をこかし皃　丈草

一茶には、

狗か鼠とるなり春の風

豆まきや鼠の分も一つかみ　蕪村

子鼠のちゝよと泣くや夜半の秋　寺寒く樒はみこぼす鼠かな　皿を蹈む鼠の音の寒さかな　芭蕉

花に寐ぬ是れもたくひか鼠の巣　半殘

鼠ども春の夜あれぞ花勒　等あり。

猪狼と俳句

狼は惶ろしきものゝ一にして、猪は可愛きものゝ一なり。

○

狼を送りかへすや鉢叩　沾圃

狼のあと蹈み消すや濱千鳥　史邦

狼は糞ばかりでも寒さかな　芭蕉

○

猪も抱れて萩の一夜かな　園女

猪の露折りかけて女郎花　蕪村

はつ露や猪の臥芝の起あがり　去來

狼に吹きかへさるゝ燈哉　正秀

少し變りて、狸には左の如きがあり、

いづれ狸得失覺えて犬もなし　文鱗

夕顔の花嚙む狸や餘所こゝろ　蕪村

猫、牛、馬等は今更ら擧げん遑あらざるなり。

蚤虱と俳句

頗る下卑たれど、昔は南窓の下、虱を捻つて天下を論せし志士さへありと聞けば、左に二三句選り出して見るべし。捻つて殺すなりと、炮烙の刑に處して天氣を占ふなりと、そは諸君の勝手たるべしと云ふ。

先づ芭蕉翁桃青に就いて見るに、貞享元年秋八月の『野さらし紀行』中、江戸深川の草庵を出でゝ駿河より名護屋を經、京都、奇瓦、大津等より伊豆に遊び、甲州に轉じて、翌年卯月再び深川に歸るや、即ち曰く、

夏衣いまだ虱を取りつくさず

越えて元禄二年三月江戸を發して、奥州路より北陸の諸國を遊歷せし『奥の細道』中には、奥州尿前の關に宿りて、

蚤虱馬の尿する枕もと

と云ひ。また『猿簑』集中には、

手のひらに虱這はする花の蔭

と云へり。『ひさご』集中には、

旅人の虱かき行く春暮れて　曲水

はきも習はぬ太刀の鞘　芭蕉

とあり。其角には、

切られたる夢は誠か蚤の跡

才麿には、

景清も呆れし蚤の行衛哉

百明には、

蚤に寢ぬ門の話や又ひとり

一茶には、

中日と知つてのさばる虱哉

やよ虱這へ〳〵春の行く方へ

蚤供に松島見せて放ちけり

蚤の跡夫れも若きは美しき

疫病神蚤に負せて流しけり
芭蕉忌や今年もまめで旅虱
寢莚や虱あすれて稍や寒き

丈草には、

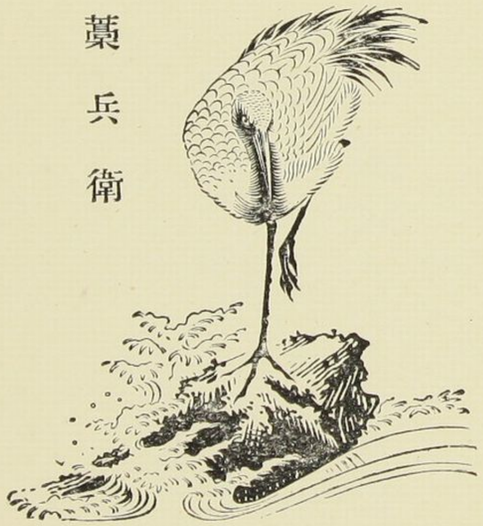
短夜や蚤の出て行く穴の耳

等あり。穢なき虫の類も、俳仙の口の端にのぼれば。直に美化さるゝなり。

溪韻松獻 完

新養老物語

京の藁兵衛



たのしきまどひ

つはものゝ交り頼みある中の酒宴も、さこそ楽しき事なるべけれど、酒なく、茶なく、わけもなき團ひも、主客をわすれし若もゝ集りしほど、世に興深き事はあらじ。

仕立おろしの薄羽織をぐるぐるとまろめて後へはふりたる一人が。

「あつい〳〵。實に暑い、とてもゝう小笠原流では
やりきれないし、俳諧どころか二の句も出やァし
ない」。
とは、さては歌仙か百韵の催しも、忽ちにしてお廢
止と見えたり。
「フム、一風子ばかりぢやァない、如何いふものか
今年の夏は暑いやうだ。」
「ァゝ、これ、後生だからそんな洒落はいッてくれ
たまふな、其他まづ例を示せば。どうぞ地方へお
上り下さい同しお直段でムいますノ、または、今

日の天氣は如何だらうといへば。さうさ降まで
は受合ふの類だ」。
「やれ〳〵、これはむづかしい先生だ」。
「いや、それは實に一風子のいふ通りだ、僕もこの
類をいはれると惣毛立よ」。
「同感々々、そのほか氣障なのは。つひ筆不精で
御返事をさし上げませんでしたといふ挨拶と、樂
屋落のしやれを分ッたやうに高笑ひをする藝妓な
ざァ、實に惣毛立つよ」。
「やれ〳〵、惣毛立つが大分はやッて來たが、しま

ひに風を引くといけないから、涼しいくらべといふは如何だらう」。

「妙々」。

「結構」。

「こりやァおもしろいね、便船集に涼しいものを。

極樂　盆山　石菖　手水　月　行水

結髪　剃髪　蜩の聲　橋の上　柳かげ

清水が本　夕露　聖人の心　小夜風

ひとへ衣

とあるが、極樂は所謂る見たい處だが行く氣なしで、其ほかはどうやらかうやら、望み通りにもならうが、聖人の心といふがむづかしてノ」。

「まァづ、僕ぐらゐなものだらう」。

「ちげへねへ、アハ、、、、」。

「古い狂歌に

涼しさは新らし疊伊豫すだれ

妻子のるすに一人見る月

とあるが如何だらう」。

「薄情だねへ、夕顔棚の下涼みの方が可やうだ」。

「茶外の句に。

すゞしさや涙にけさるゝ立話し

「如何もいゝね。」

「大磯あたりの事を思ひ出すテ」。

「僕はまだお耻かしい事に大磯は知らないが、二見の景色は實にいゝよ」。

「フヽ、さうでないといふ事だ」。

「なぜ〳〵」。

「二見と見られないッて」。

「どうしても此男は度しがたいノ」。

「アハヽヽヽ」。

「そこでノ、可笑しかッたは連の男が。ハテナ、二見の浦にしちやァ日の出がないがト午後三時だといふに眞面目で言ッたには大笑ひさ」。

「アハヽヽヽ、こりや耐らない」。

「三圍りの鳥居へ足をふんがけた格だ」。

「ちげへねへ」。

「それに、なにせう

參宮の目にたつ花の都人

つれもちらさぬ伊勢の神風

同勢十何人といふ江戸ッ兒ぞろひだから實に優待

たね」。

「フム、さうだらう〳〵」。

「それから、畏れ多い事だが、兩宮を參拜した時の心持といふものは、實に〳〵もう、かたじけなさに涙こぼるゝで、思ひ出してもと申しては恐れ入るが、ありがたくッてノ」。

「なるほどな、それこそ賢人の心になッたらう」。

「さう〳〵、實にさうだ、

今日の心ひとにかたらむ神路山

と蒼虬のよむだ通りだ」。

「そうして、彼の、

古市の古い顔せぬおどりかな

といふを見たかね」。

「何爲ぞ、そんな所へだ」。

「さうだらう〳〵」。

「おさやう樣でムいませう」。

「アハ、、、、、津は」。

「行きやした。與作の唄の文句の通り賑かな所で、

夕立の來かゝるや津の町はづれ

夕かげや津の町すぐる小鰺うり

津の町を馬に乗り行く角力かな

みんな土地の廣さをほめた吟だ」。

「なるほど、そして、名古屋は」。

「往きにも返りにも寄ッたが、

五月雨や名古屋ばかりの二ッ星

星どころぢやァない、太陽のやうに光り輝く、世界無類の鯱いや見事〳〵」。

「熱田も無論參拜したらうね」。

「いふにや及ぶだ、

磨直すかゞみも清し雪のはな

御修覆の時、蕉翁が詠み出てより、星霜茲に二百年」。

「管絃になりト割書をするところだ」。

「去ぬる二十六年に御改造ありしと聞き、我も一句奉詠せむと思ッたがね」。

「よしたか」。

「ウム」。

「感服。全く平人は只に神威の尊嚴に拜伏してしまッて出るものぢやァないよ」。

「さうだらうの」。

「これ〳〵、平人扱ひは驚くな」。

「なぜ〳〵」。

「僕がそこで奉詠しない仔細は、なか〳〵に意味深長な譯があるのだ」。

「フーム」。

「まづ、僕の身にもなッて考へて見たまひナ、今更芭蕉より平凡な句もよめず、ト言ッて名吟を吐て見たまへ、可哀相に、先哲を辱しめるやうなものだ」。

「ナイ〳〵、一風の目の色は大丈夫かね」。

「ムヽ、まだ可いやうだ」。

「志とナ、鰯でも買やァしめェし」。

「アハヽヽヽ」。

「それから一驚を吃したのは、いろ〳〵立派な建物のある中に、近い頃新築になッた東陽館といふ、まづ東京の紅葉館風のものが出來たがね、庭の廣さが何千坪とあッて、山あり池あり、實に仙境に居るの思ひで、

涼しさのあまりて襟を合せけり

といふまであそびやした」。

「それは好いたのしみだッたの、併し僕は去年四條で遊むだが、

おとしたる團扇もすゞし加茂川に
とられぬ水の月とながれて

いや涼しい事だ。

それから住吉へまはッたよ。世に住吉の里なんテ歌によむ位ゐの勝地、それから須磨、舞子、明石と來ちやァ實に風光佳絶、こゝは翁が蝸牛角ふりわけよ須磨明石と詠だところだ」。

「シテ、その時に蝸牛がかう言ッたッてね」。

「フム、なんと」。

「芭蕉さん御無理を仰有ッちやァいけませんテ」。

「なぜ〳〵」。

「片つむりではふりわけやうがありませんトヨ」。

「ちげへねへ」。

「アハヽヽヽヽ」。

「いや、なんと言ッても佳いのは松島だよ」。

「なァに、日光だね」。

「いや、江の島だ」。

「鎌倉だ」。
「房總の海岸だ」。
「伊豆地方だ、中にも熱海は可、よ」。
「箱根が涼しいよ」。
「奥州の白河から先の方に見るべき處がある」。
「なに、宮島の事だ」。
「橋立だ」。
「富士山だ」。
「善光寺だ」。
「沖繩だ」。

「近江八景の事だ」。
「長良川の鵜飼がいゝ」。
「新高山の頂上が涼しい」。
など〻日本中の名所好み、中には細見とやらにて月旦をなすにひとしく、名勝記の類にて通がッたことをいふもをかし。
やがて一人は仔細らしく咳拂しつ。
「涼しいといふ事につひて、茲に一條の物語、まかも斯る末世にめづらしい美談ありさ」。
「フーム、それは耳より、如何いふ事かね」。

「それを僕が一編の小説につゞッたから、讀でくれたまへ」。

「やれ〳〵、そいつは驚く」。

「でもあらうが折角書いたのだ、交誼上よむでも可いぢやァないか」。

「さては、やみ〳〵謀計に落たやうなものだ」。

「アハヽヽヽ」。

新養老物語

「夕立の雨も一と降り馬の背を、わけて涼しき川岸に、柳の枝のよりそひて。

風鈴もだんまりで居る今日の暑さに、さすが血氣ぞろひの建具芳の職工場も、おの〳〵釣り葱の水の切れたらむやうになりて、鋸の目を立つる音のみ冴ゆる日最中、一人の壯佼が湯の如き汗を流しつゝ、鉋

を研ぎながらのそゞろ節なり。

大業にいはゞ、空谷の跫音とやら、迅雷耳を掩ふに暇なきとも例へつべき此の聲に、他の者も元氣づきて。

「民、いゝ氣なもんだな、唄の文句は豪勢涼しいがその咽ぢやァ暑熱の上塗りといふもんだ」。

「へゝ、なんとでも言ッし、新道の師匠などは。

のこる暑さを川水へ流すうは手の歸り舟、草の葉にやどりし月も小夜風に、にくやこぼれて、

はら〳〵と、露かおづくか、更かつゆか。

と、おいらが唄ふと、羽織でも引かけてもらひたくなるとよ」。

「そりやァ、さうだらうとも、寒氣がしちやァな」。

「エヽ、そねめ〳〵」。

「アハヽヽヽヽ、なにしろ親不孝な聲だ」。

「ウフヽヽン、親不孝な聲たァありがてへ」。

「な、なぜ」。

「おいらの咽があんまり美音から、定めし身が持て

めへといふのだらう」。
「と、とほうもねへ、聞きやうだ」。
「なぜ〳〵」。
「なぜぢやァねへ、まア物を考ッて見ろ、お前の親が、兎も角もサ、人間近く生みつけて置たのに、鳴く聲鶴に似たりと來ちやァ、うかばれた話しぢやァねへわな」。
「フン、なんとでも言はッし、天知る地知るだ」。
「自分だけ氣がつかねへから困ッちまわァ」。
「アハヽヽヽ」。

「時に、親不孝といへば、もう孝行八百屋が來る時分だな」。

西諺に德操なき美人を匂ひなき薔薇とたとへし如くよしや學博く才高しと雖も、机に頬杖つきて、硯の水にも生の親を勞する輩は、實に薪にもなし得ざる枯木にもひとしかるべし。

今しも噂に上りたる、孝行八百屋と呼ばるゝは、深川邊より、雨にも風にも、商ひに來たれる男にて、目に一丁字を解し得ざれど、生れ質、こゝろやさし

く、年老ひし父、の愚に返りて、小兒にだもまさる無理も、只はい〳〵と畏みつゝ、暑くなく、寒くなく、飢うなくと言ひたけれど、さて自由ならぬは、暑くなくといふの一事は、如何ともせんやうなく、是が上流方ならば、避暑の湯治のと、榮耀の上の榮耀をもなし得べけれど、その日〳〵に追はるゝうへ、勿躰ないことながら、朝日夕日とも隈なく輝きたまふ茅の屋とて、たゞ〳〵心を痛むる耳にて、得意先を廻りながらも、どうか涼しくなる工夫はでざりませぬかと、我れ知らず幼なきことを言ひ出

ては心なき人に笑はれける。

地響きのせむまで野菜物を積みたる荷車は此處に止りて、やうやくに脱ぎ得し管笠もて、二ッ三ッ胸をあふぎ、頓て片手に簾を掲げつゝ一禮せし彼は

「今日は如何でムります」。

と、賣品を記せる附木やうの板を出しぬ。

壯佼達は、にこやかに是を迎へて。

「やァ暑いのに精が出るね、丁度お茶がはいッたところだ」。

「さァ、一ッ摘みなせへ」。

「親父さんにも持て行ッてやんなせへ」。
と、菓子盆のまゝ差し出しぬ。
嗚呼、天魔鬼神も挫ぐべくして、一寸の虫には道を讓
るの江戸氣性は、嬉しい哉いまだ存れり。
附木を取次ぎたる一人は。
「おかみさん、八百屋が來ましたよ、一ッ讀み上げ
ませうかね、エー。
ぎやがいも　しらたき　せいよ人じん
「東西、　東――西」。
きうり　白うり　なす　らんきう

「さア、分らねへ、らん。。。きう。。。とはなんだらう」。
「たしか、新内にあッたやうだ」。
「いゝえ、新ねぎの事ではムいません、蕗子でムい
ますよ」。
と、眞面目なる八百屋が答へに、思はず一同ふきい
だしぬ。
「アハヽ、蕗子かい、それから、
いんぎん　小かぶ　ふき　わさび
はたぬきめざし
「はたぬきめざし、なんだらう」。

「さうよなァ、あんまり暑いので、目刺が肌をぬいだのだらう」。

「イヽエ、それは、腸ぬきめざしでムいます」。

「ちげへねへ、アハヽヽヽ」。

「イヤ、腸ぬきで思ひ出したが、昨日向ふ裏の隱居さんの所へ行ッたが、例の通りいろ〳〵の歌や發句のはなしだ」。

「なるほど」。

「そこでおいらが、御隱居さんわたくしやァ、江戸兒は口先ばかりで腸がないとかいふ歌があるさうですが、平常からして癪に障ッてなりやせんと言ッたらな」。

「ウム、うめへ事をいッた」。

「そこで、隱居さんの返答がおれの意に叶ッた」。

「生意氣をいふねイ」。

「アハヽヽヽ」。

「まァなんと言ッたのよ」。

「隱居さんの言ふのにはノ、いゝや〳〵、なまじッか、今出來の腸ならいッそ無へ方が腸もこの通りなり雪だるま

で、どこまでも潔白で可い、竹を割ッたやうな、蟠りの無へ氣性が、人間の中の人間だとよ」。

「なるほどありがてへ」。

「うれしい事をいッてくれたな」。

「やい、泣にやァ及ばねへや」。

「をかしな男だな」。

「アハヽヽヽヽ」。

「そして、後ろの床の間にかけてある瀧の軸を指しての

くだけては三千丈や瀧の月

心もちの好い句だ、この畫を見て、この句を思ッて居ると、實に暑さ知らずだと言ッたがの。

實にその瀧の畫といッたら好いなァ、見れば見るほど、水音が聞えるやうで、飛沫がかゝるやうでしまひには、齒の根が合なくなるやうになッて、

瞬きもせず聞入りたる八百屋は、足下の砥水を蹴返し、疾風の如くに、去かも、あてどもなく飛出して只ある小路を一軒々々に覗きこみ居りしが、やうやくにして、ちらりと見たる飛泉の一軸、おの

れやれと、あり合ふ石を足代に、ぬッと窓より首さし出しぬ。

さばらくありて。

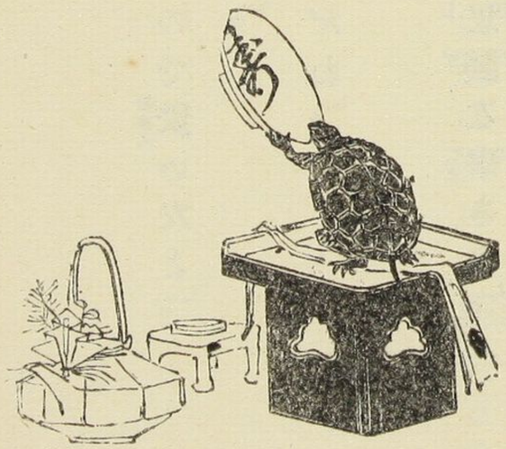
「ありがたう御座りました」。

と、餘念なく花を活け居し隱居の耳へ轟く一聲、打驚きて見返る間もなく、如何なる機會か、窓の竹一二本、頤の骨にてヘシ折りしまゝ逃げ出しぬ。

虎と見て石に立つ矢の例あり、禿たる筆に墨ふくませ、血走る眼物凄く、一念凝ッたる瀧の一軸、思ふ

がまゝに描き上げたり。

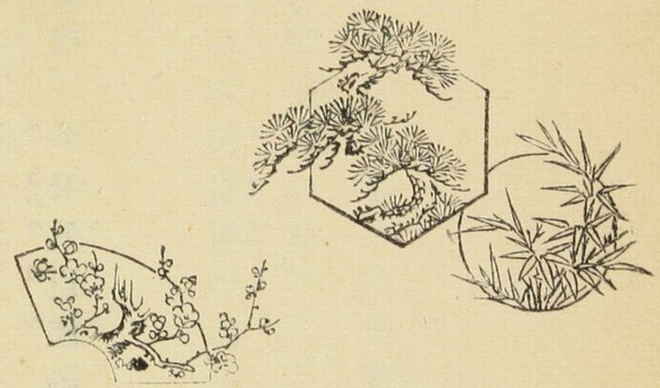
只見る柱傾き、簷破れし茅屋に、絮を亂し雪を噴くの幽泉は、さながら玉簾を下垂せるが如く、水煙四邊に飛散して涼風徐に起るのほとり、老翁寛々として盃を擧げぬ。



〔をはり〕

「と、いふのさ」。
「大層におまひがやかましいので驚いたよ」。
「おかし實説だけに面白いね」。
「實説だけに面白いは御挨拶だね」。
「アハヽヽヽ」。
「だか、一念ではあらうが不思議な事さの」。
「いや、是は道理上、涼しくなッた譯があるさ」。

「フーム。とはまたなぜだ」。
「まづ僕の考へでは、多分八百屋の描いた瀧のきれ地が丿」。
「ウム」。
「寒冷紗であらう」。



尾崎紅葉君序

巖谷小波君序

京の藁兵衞君撰

東京市日本橋區樽正町一番地

文祿堂發兌

滑稽類纂

二

◎夫れ滑稽は哲理にして、實に處世上の要素たり。

◎今や文物日に月に盛んなりと雖も、惜い哉該要素に欠くる處あるを憂ひ、古今の珍本數千卷を渉獵して。

◎元祿以降二百年間の

▲笑話 ▲俳諧 ▲狂歌 ▲狂句 ▲古諺

の類を蒐集して、是を

●神祇 ●釋教 ●君臣 ●親子 ●武士

●醫師 ●疾病 ●貧福 ●商估 ●婚姻

●戀情 ●雜夢 ●無常 ●歌俳 ●謠曲

●茶の湯 ●立花 ●圍碁 ●將棋 ●淨瑠璃

●演劇 ●角力 ●交友 ●飲食 ●奴婢

●慾情 ●吝嗇 ●不學 ●乞食 ●偷盜

●遊里等

◎其他、森羅萬象に關する滑稽數千章を各々部門に類別し。

◎且、附錄には

籔坂慾之守 一名 噺しの殿樣

なる奇想天外より落るの妙作を添へ、以て彼の

●桃太郎 ●舌切雀 ●花咲爺

●猿　蟹　合　戰　●かちゝやま

なるお伽噺しをして巧に大人君子が、喜むで讀み、悅むで聽き給ふべきやう飜案なしたるの手腕、

◎及び卷頭に、露の五郎兵衛、鹿の武左衛門の二氏が肖像を掲げ、或は「つくゞし」と題して「落語の沿革」を示せるが如きは、實に驚くべきものありとす。

◎而して本書は弊堂が出版界に相見ゆるの初陣として一大功名を博せむが爲め、其

▲用　紙　▲印　刷　▲寫眞版　▲木　版

等に於るの注意周到なる固より牙籌に倚らざる也。

◎宜なる哉、苦心は遂に空しからず、發行の日や尙淺しと雖、江湖の喝采湧くが如く

◎既に萬餘を賣盡して今や四版を印刷せんとす。

◎是れ深く愛讀諸君。

◎及び、後進の余輩をして起たしめたるの。

◎先輩書肆各位。

◎好評を賜りたるの。

◎新聞、雜誌記者諸先生に、感謝する所也

◎嗚呼、實に本書の如きは、●文學家　●宗敎家　●美術家　●演說家　●交際家　●講談家　●落語家　●粹士通客

に論なく、●或は消閑の具とし　●或は旅行の好侶伴とし　●或は爐邊の款語として、

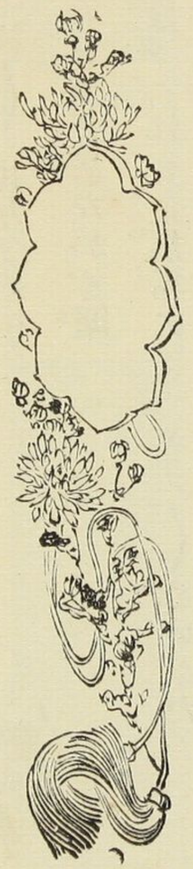
◎世間幾億の人士を通じて一讀の關係ある事を、勸誘して止まざる也。

◎定價は　全一冊　金四十五錢　郵稅は　六錢なり

◎發兌元は

東京市日本橋區槇正町壹番地　文祿堂書店

◎大賣捌は　全國各地書林なり。



老鼠堂永機宗匠題詞

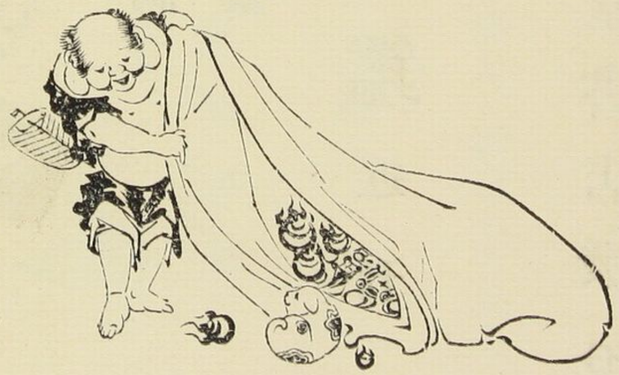
文祿堂編輯局編纂

古今名句鑑　近刊

文祿堂書店發兌

布袋

○かうどし〳〵寶物がたまツちやア
ちかたがない、少し土用干をしま
しやうと、布袋さま例の袋から
ざら〳〵と、ぶちまけると、
不思議にも小犬が一疋居る
「これ〳〵 其方はどうし
てはいつて居たかと聞
けば。これも金無垢にて。チン〳〵といふた。



全一冊 ●木板繪入 ●定價金三拾五錢
上等半紙摺美本 ○郵税四錢

◎本書は柳亭翁が該博なる考證に據りて、名妓高尾が初代より十一代に至るの傳説を詳述せられたり。

◎されば文學家、美術家の參考用は更なり、半夜紅燈の下に是を繙かば、恍惚として古遊君と相語るの思ひあるべし。

發兌元

文祿堂堀野書店

御水おしろい　ちら露

へちまの水さらし

御おしろい　富士見かた

御ねりおしろい

花の雪

東京市京橋區銀座三丁目

大坂屋　㊇　松澤八右衛門

電話新橋五三四番

樞密院顧問官　細川潤次郎君題辭

前文科大學教授　内藤耻叟先生序

國學院講師　井上頼圀大人跋

東京圖書出版合資會社編纂

帝國人名辭典

發行所　東京市日本橋區下槇町十一番地　東京圖書出版合資會社

帝國人名辭典

◎上質舶來紙菊判大本　◎全一冊
◎總紙數　二千頁餘　（六號活字廿二字詰、冊一行三段）
◎人員　一萬六千餘人
◎挿圖　凡　六　百　個
◎定價　金七圓五拾錢
◎小包遞送料　百里未滿十六錢百里以上冊二錢の割
◎卷首に『皇統系圖』を奉載し
我　皇室の尊嚴を知らしむ

背革總クロース
金文字入美裝堅牢製本

◎卷中には　出所正確なる　●肖像　●落款　●花押
●印章　を挿入す。
◎卷末に『異名類纂』を附したれば索引に至便なり。
◎此書は本邦古來の明君、賢臣、仁人、義士、孝子、忠僕、節婦烈女等を始として、其他學術技藝に於て苟も一頭角を見したる者は博く史乘に徵し、蒐集して遺すことなく、
◎其系統性行　を記述すること正確にして簡明、編者之が爲めに三度び裘褐を易へて稿を脫せり、亦以て其杜撰に非ざることを知るべし、
◎斯種の書　世に乏しからずと雖も、或は繁に過ぎ、或は簡に失

し、未だ嘗て、

◎該博にして、簡明なる此書の如きものあるを見ざるなり、

◎要するに本書は日本古來の人物傳を集大成したる者にして、學者の座右に、常に缺くべからざる、至便の寶典なり。

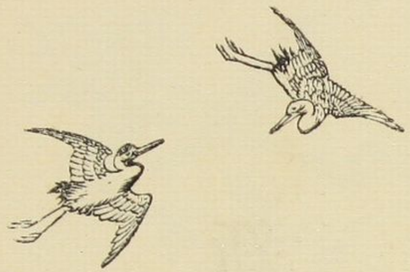
東京圖書出版合資會社代理店

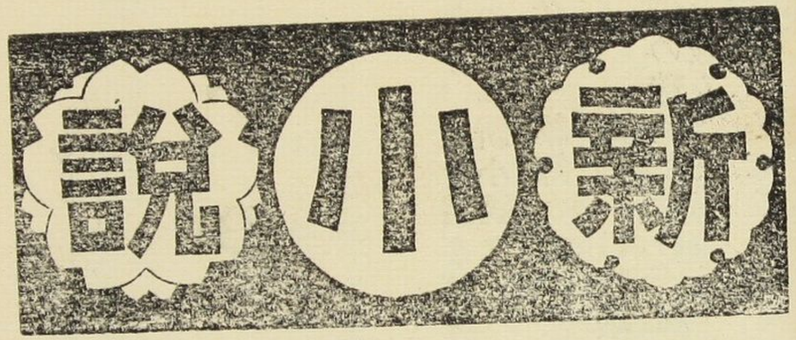
東京市日本橋區榑正町壹番地

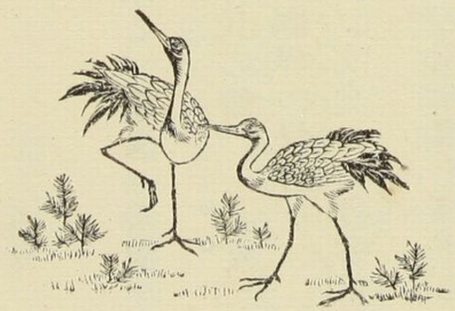
賣捌所　文祿堂　堀野書塵

東京圖書出版合資會社出版目錄

御入用の節は御申越し次第無代價にて御送附可申上候







新小說

◎之を繙けば錦繡の如く、之を讀まば興味來る、讀過一番猶手を放つに忍びざるものは我新小說なり。

◎小說　は文豪の傑作。　雜錄　は多く露伴氏の筆。　人文　には宙外氏の健筆あり。　劇苑　は精覈なる劇界の批評。

◎懸賞　吟咏には江湖の珠唾を萃め。　譚叢　　文苑　　投書箱等其精を選び、其粹を拔く。

◎時報　には殊に　寫眞　と文とを以て毎月の出來事を報ずるは

蓋し我新小說を以て嚆矢となす、題して　寫眞世事日記といふものこれなり、表紙　は河村清雄氏の意匠にして　口繪　以下は凡て畫伯武內桂舟氏其門下の艶筆挿入の寫眞版には、編輯員が經營慘澹たる意匠を施したる　風景　人物　等を載せたり。

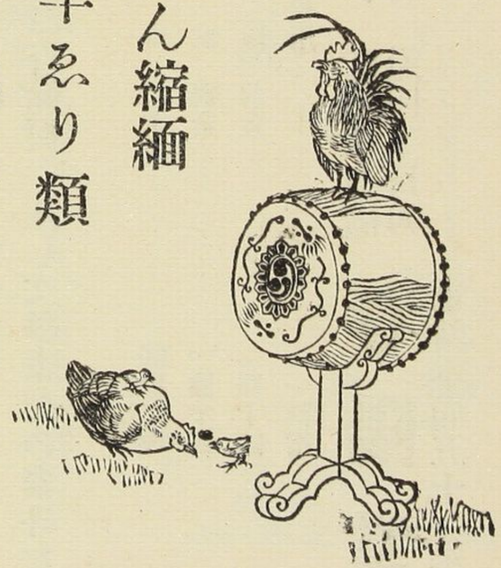
◎本誌　毎號二百餘頁　蓋し文學雜誌の泰斗なり。

實價

一冊　二十錢……郵稅二錢
六冊　前金……一圓十錢
十二冊　前金……二圓十錢
郵券代用　……一割增

發行所　東京日本橋通四丁目角　春陽堂　電話本局五十一番

西京ゆうぜん縮緬
新形御半ゑり類
御帶どめ都むすび
御進物用御切手調製仕候
日本橋區箔屋町十七番地
電話本局一七二七番
三木村屋太田商廛



御利益

枯れかゝつた盆栽の梅の木へ、勿躰ない事なから、洒落同樣に大黑樣を飾つて置くと、たちまちの内に、木がせい〳〵といきかへりて、それは〳〵見事な花が咲ましたよ。ハヽアそれは大方大黑さまのつちがいゝせへであらう。

夏の夜や　谷雄

蚤蚊も知らぬ

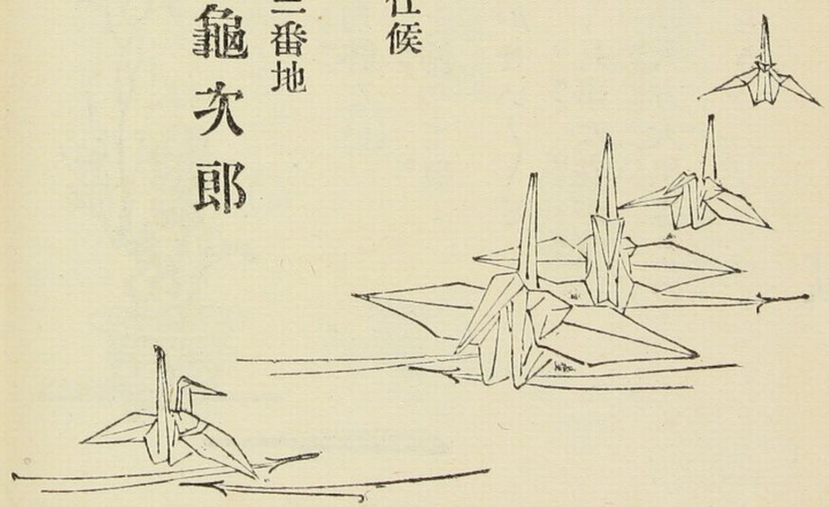
酒の味

酒醤油類

吟味精選之品調進仕候

東京市日本橋區榑正町三番地

㊟ 太田龜次郎



儀式用鼈甲御櫛笄

珊瑚根掛諸寶石類

貴金屬簪根掛帶締

美術蒔繪彫刻櫛笄

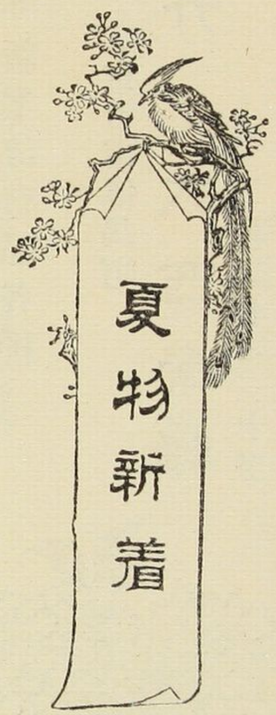
寶石入彫刻指環類

此外新案流行品各種

東京市南傳馬町

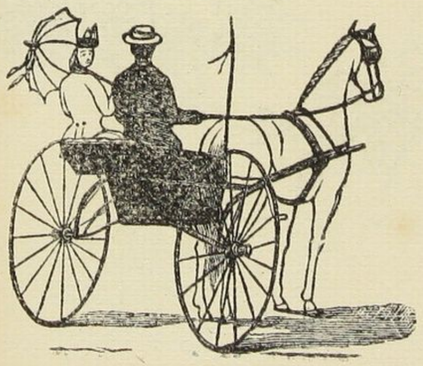
白牡丹　大西榮輔

電話本局三十番



絨毯及ラセン。
御敷物。白毛布。
窓掛及日除一式。
蒲團敷布。
夏車掛。

㊥東京市南傳馬町一丁目 京橋區 中島屋和洋毛織物店
電話本局七百廿壹番

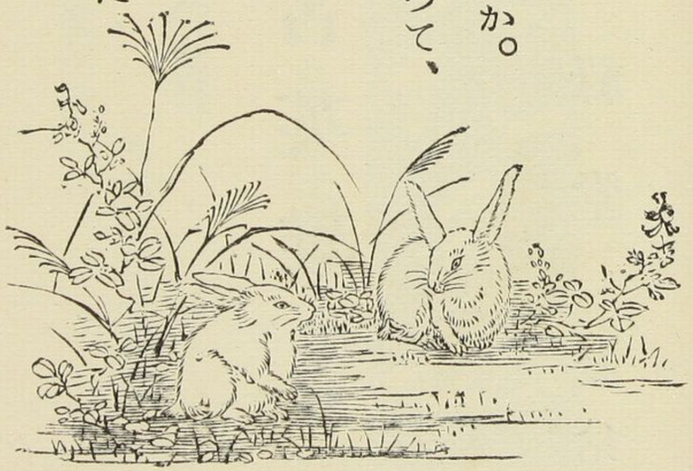


玉兎

「なんと白さんいゝお月様ぢやァないか。

「ヘンなんの面白くもない、お月様だつて、中に居るのはおらが仲間だ、なにも大さわぎをやつて見るにも及ばねへワ。

「これ〳〵、身分が違ッちやァしかたがねへ、おら達は野に居るもの先方は、雲の上だワ。



吻鹿庵主人著

嗚呼古英雄 近刊

文祿堂 發兌

磯野秋渚先生纂訂

上等舶來紙三百廿ページ瀟洒なる大和綴四六形美本

卷之一 金三拾錢 郵稅四錢

卷之二 金廿五錢 郵稅四錢

郵券代用一割增

發行所 大坂市東區淡路町四丁目 中村積德堂

◎本書はあらゆる本朝古今名家の筆になれる紀行游記を集めて大成したるものなり、その文躰も亦た古今のしなありて一樣ならず、

◎和漢雅俗相錯綜して篇々その觀を異にす、集めたるは、王朝時代の雅文を始とし、俳文、狂文、漢文、直譯體より、院本、謠曲、箏曲の詞に至るまで英を採り、秀を鍾めたり、以て臥游の資となすべく、以て記事を學ふ模範となすべく、以て地理研究の材料となすべきなり、爰に發兌したる第一卷には、東海道中記の最も趣味あるもの、二十六篇を編錄し、間々詩歌俳句を挿めり、

◎雅文には赤染衛門、加茂眞淵、木下長嘯、白拍子武女の如きあり鐵心、藤陰、海鷗、竹洲、四家合作記行は一種の創體、土御門卿の東行說奇々羅金鷄の日記は一讀人の頤を解かしむる滑稽文、羅山、益軒、旭山、林外等の文は記行中の最も妙なる所を抄錄し須藤南翠の、雨夜汽車は現時の東海道中を敘して漏す所なし。

◎卷之一　目次大略●東紀行　烏丸光榮●函嶺澡泉　菅竹州●尾張紀行　赤染衛門●逢坂の關　瀨田川　貝原益軒●吾嬬の道の記　木下長嘯●通行ぶり　加茂眞淵●道の記　都築師方●東路の日記　奇々羅金鷄●庚子道の記　白拍子武女●丙辰紀行　林道春●土御門殿東行話說●雨の夜汽車須藤南翠其他十三種及詩歌俳句

◎卷之二

第二卷には主として夏秋の際に於ける遊記三十餘篇及詩養俳句狂歌等を聚めたれば一讀の下に日光の諸瀑布●那智●歌老●赤目四十八瀧●四萬●熱海●鹽原●有馬●城の崎の温泉●函根●岐蘇の山水など簇々と目睫に集り來て坐ながらに山影水聲の間を逍遙する思あらしむべし　目次大略●赤目四十八瀧●鎌田梁洲●晃山觀瀑　中村確堂●中禪寺　板倉節山●養老の春　本居豐穎●城の崎温泉　蘆原蟹麿●平安記行　太田道灌●鎌倉紀行　鴨長明他十七種

漫遊旅窓の好侶伴
清婉優美の新樂器

吟花
嘯月

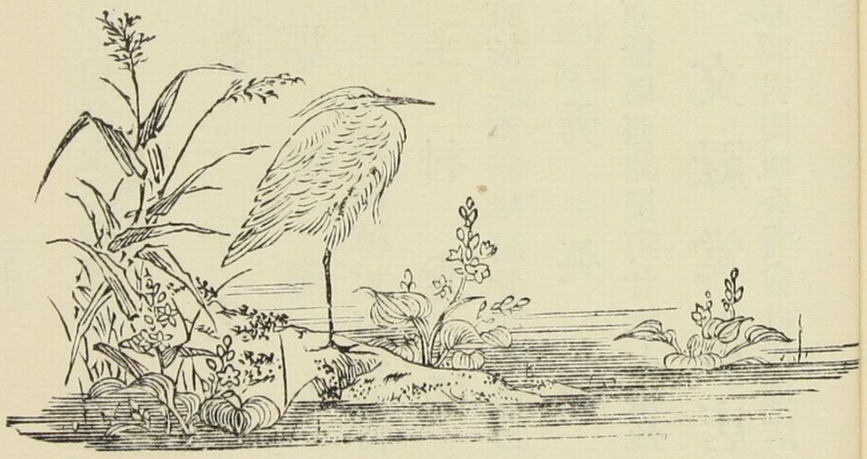
風琴笛

製造元　東京好音舍

風琴笛獨誓古一冊添
定價金六拾錢遞送料拾錢

大賣捌

東京市日本橋區通四丁目七番地　東雲堂
同日本橋區新右衛門町十三番地　集文館
同京橋區中橋和泉町四番地　藍外堂
同日本橋區樽正町一番地　文祿堂



明治三十二年七月五日印刷
明治三十二年七月十日發行

三十

著作者　池元半之助

發行者　堀野與七
東京市日本橋區博正町壹番地

印刷者　玉村秀橘
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元　東京市日本橋區博正町壹番地　文祿堂書店
東京圖書出版合資會社代理店

定價金三拾錢
（郵稅四錢）

版權所有

三府大賣捌諸氏

東京　●東京堂●岡崎屋●上田屋●嵩山堂
●林平●服部●青野●栗原
●東雲堂●三松堂●尙古堂●大川屋

京都　●東枝律書房●河合書房

大坂　●盛文館●吉岡●嵩山堂
●河内屋中井●中村積德堂

其他　全國各地書林雜誌店諸氏

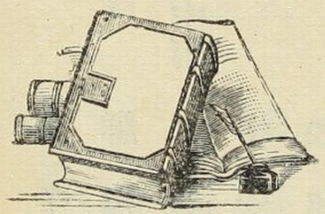
圖東京圖書出版合資會社代理店諸氏

東京市日本橋區通リ三丁目	成美堂	河出靜一郎	
同 通リ四丁目	東雲堂	西村寅次郎	
同 新右衛門町十三番地	文祿堂	堀野與七郎	
同 博正町一番地	集文館	木田吉太郎	
同 柳原河岸二號地	學友館	三好菊太郎	
同 京橋區弓町十二番地	三松堂	松邑孫吉	
同 淺草區三好町七番地	藍外堂	奥村金次郎	大川錠吉
同 中橋和泉町四番地	聚榮堂		
横濱市 松ヶ枝町	弘集堂	天野保之助	
京都市 佛光寺通リ烏丸	東枝律書房	東枝吉兵衛	
攝津國 神戸相生橋詰	久榮堂	熊谷幸助	
伊賀國 上野農人町	精文堂	安屋勝次郎	
伊勢國 津地頭領町	崇文堂	豐住謹次郎	
同 四日市南町	吉田屋	伊藤善太郎	
尾張國 名古屋本町	金華堂	川瀨代助	
同 名古屋鐵砲町	玉潤堂	三輪文次郎	
同 名古屋門前町	文昌堂	淺見鉦太郎	
三河國 豐橋吳服町	豐川堂	高須廣治	
遠江國 濱松連尺町	谷島屋	齋藤源三郎	
同 見附	株式會社	中遠日進社	
同 掛川	叢文堂	飯塚仙太郎	
同 金谷	文化堂	佐塚英一	
駿河國 靜岡傳馬町	喜多川屋	齋藤茂右衛門	
同 沼津上土町	文林堂	渡邊八重吉	
甲斐國 甲府柳町	柳正堂	大塚源太郎	
伊豆國 三島	文正堂	飯田市右衛門	

上總國　東金　多田屋　能勢土岐太郎
下總國　佐原　正文堂　朝野　利兵衛
近江國　大津京町　南强堂　島林　專二郎
美濃國　岐阜泉町　郁文堂　淺野　榮次郎
同　大垣岐阜町　岡安書房　岡安　慶介
信濃國　長野大門町　小桝屋　西澤　喜太郎
同　松本町　水琴堂　小松　爲吉
同　上諏訪　日新堂　宮坂　榮三郎
下野國　宇都宮大工町　集英堂　内山　港三郎
磐城國　白河天神町　奥村書店　奥村市右衞門
岩代國　福島通五丁目　上野屋　齋藤　彦太郎
陸前國　仙臺　大町　木文書店　木村　文助

同　仙臺國分町　有千閣　山本　音四郎
羽後國　横手鍛冶町　鮮進堂　大澤　堅治
越前國　福井佐佳枝中町　日新館　松原　榮
加賀國　金澤　片町　宇都宮書店　宇都宮　源平
越後國　長岡　松風堂　松田　周平
佐渡國　河原田　中山書店　中山　萬平
播摩國　姫路西二階町　汲古館　木村　次作
備前國　岡山西大寺町　美延堂　武内　彌三郎
美作國　津山　堺町　照文堂　仁科　久造
安藝國　廣島　西横町　日新館　清水　庫三郎
筑前國　博多　中島町　森岡書店　森岡　榮

筑後國　久留米米屋町　金文堂菊竹書店
豊後國　大分　竹町　精華堂甲斐治平
肥前國　佐賀　白山町　汲古堂河内壯助
肥後國　熊本新二丁目　樂善堂長崎次郎
薩摩國　鹿兒島　中町　文奔堂吉田幸兵衛
渡島國　函館　末廣町　大盛堂小島千代松



商は弘通を尊び業は博識を貴ぶ
富にして智仁勇の三德を欽けば
力なきの富といふべし
富貴とならむ尤も力强き助けある
者は正直なり
風雪を經ざれば春に遇はず
死而不滅者壽也